靖国神社社頭の桜

会報
特攻
令和元年５月

第１２５号

公益財団法人 特攻隊戦没者慰霊顕彰会
編集人　金子敬志
発行人　石井光政
印刷所　島根印刷株式会社

目次

序文・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・理事長　藤田幸生　2
第40回特攻隊全戦没者慰霊祭・・・・・・・・・・編集長　金子敬志　3
宮崎縣護国神社特攻勇士之像奉納式・・・・・・・理　事　大穂園井　7
慰霊祭等参加報告
神雷部隊慰霊祭・・・・・・・・・・・・・・・・編集長　金子敬志　9
会員投稿
特攻々撃法参考・・・・・・・・・・・・・・・・編集長　金子敬志　10
呉・江田島研修
一　研修の概要・・・・・・・・・・・・・・・・編集長　金子敬志　23
二　参加者の所見
1【2／28呉編】・・・・・・・・・・・・・・・会　員　青木和子　24
2【3／1　陸軍㋹史跡】・・・・・・・・・・・会　員　原　知嵩　28
3【教育参考館】・・・・・・・・・・・・・・・会　員　高橋　暢　29
4【Q基地・P基地】・・・・・・・・・・・・・評議員　及川昌彦　31
海上挺進第三戦隊及び基地第三大隊・・・・・・会　員　中溝二郎　32
特攻機上通信士坂伍長の殉職・・・・・・・・・会　員　大槻健二　40
沖縄海上特攻4・7　浜風・・・浜風乗員　土井兼廣二等兵曹　47
連載　山ある記6・・・・・・・・・・・・・・会　員　池田康博　51
広報の部屋
「第六回戦歿学徒慰霊祭」のご案内・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・52
文芸欄　歌俳柳の広場
短歌・俳句・川柳・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・53
事務局からの報告等・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・54

挿絵提供　空自ＯＢ　宇山氏

「序　文」

この「特攻」誌が、会員の皆様の御手元に届く頃には、年号が変わり、「新しい時代」が、始まっていることでしょう。日本国の年輪が、また一つ増えたのです。おめでとうございます。

我国では、先の大戦が終わって以来、七十年余が過ぎ、平和が続いてきました。「平和と自由を謳歌」して戦後復興を果たし、日本は、自由民主主義国家の一つとして発展を遂げ、国を営んでまいりました。

この間の世界の動きを省みてみますと、我国が、国際社会に主張した有色人種の「人種差別撤廃」、インド、東南アジア等の「植民地解放」等は、着実に実現してきております。この間、我国は、国際機関での活動、国際協力やＯＤＡ等を通じて、発展途上国等に対する支援、紛争抑止、安全確保、停戦管理等の平和維持活動を、積極的に進めてまいりました。世界大半の国々は、そのことを認め、感謝してくれております。

一方、この間の国の営みにおいて、先の大戦の国家的反省は、国として体系的に進められてきたのでしょうか？　私は、疑問に思っております。　戦後、占領下でできた新憲法の下、警察予備隊として発足した防衛省自衛隊は、限定された態勢下で任務遂行に当たり、戦前を振り返る余裕などは、ありませんでした。外務省や文科省等の国家機関、担当セクションも、反省を放置してきました。結果として、七十年を過ぎた今においても、隣国からの捏造データに基づく、我国批判に、反論できる知見を、国として、国民個々としても、持ち合わせていないのが、現実であります。研究も教育も、報道も、あらゆる面で、施策がなされていないと思われるのです。

今年からは、新しい時代に入ります。この新しい時代の課題は、三代前の大戦の事実に、国家として、勇気をもって、きちんと向き合い、反日のプロパガンダに対抗できる国にしていくことではないでしょうか？

そのことこそが、「戦後を終わらせ、特攻隊で戦没された諸霊の皆さんに、安心して頂ける道だ」と、考えるのであります。

その意味において、昨年末、海軍歴史反省会の議事録を起して、「特攻、知られざる内幕」（ＰＨＰ新書）として出版された著書は、貴重であります。呉の戦艦「大和」ミュージアム館長、戸高一成氏が、編者となって出された海軍特攻作戦当事者達の証言であり、貴重な、数少ない、真実の声であろうかと思えるからです。

是非、真実の声に接してください。信念をもって前進していくためにも・・・！

（以上）

第40回特攻隊全戦没者慰霊祭

編集長　金子　敬志

一　慰霊祭

平成31年３月30日（土）11時～12時
於　靖國神社拝殿・本殿

式次第
国歌斉唱　　トランペット　　堀田　和夫
修抜、献饌　祝詞奏上　　牟田　春雄
祭文奏上　　理事長　　藤田　幸生
献吟　　一誠流　　吉野　一心
龍笛　　逢坂　龍信
奉納演奏
世田谷コール・エーデ合唱団
指揮　　大穂　孝子
「夕焼け」「ふるさと」
全員斉唱　「同期の桜」「海ゆかば」
トランペット　　堀田　和夫
牟田　春雄
昇殿参拝　参列者一同
黙祷
「国の鎮め」
トランペット　　堀田　和夫
牟田　春雄

平成31年３月30日（土）11時より、靖國神社において第40回特攻隊全戦没者慰霊祭が催行され、御遺族約30名を始め御来賓、戦友、一般会員等を合わせ２２１名の方々が参集し、英霊に哀悼の誠を捧げた。

第31回の慰霊祭から実施日を３月末の最終土曜日としている。

３月末は桜の開花時期であり、例年その状況が気になる所であるが、今年は３月21日に開花宣言があり、当日はちょうど満開となっていた。

靖國神社内には東京の桜の「標本木」があり、また桜が沢山あるので、満開の桜を見物するため多数の観光客が訪れ境内は大いに賑わっていた。

その中、参集殿前に設けられた受付には時間が近づくにつれ参加者が次々に集まって来た。

参集殿前に設けられた受付

お集まり頂いた参加者の皆様に昇殿前に各担当者から参集殿内控室で説明が行われた。

終了後、拝殿に向かい全員着席、慰霊祭開始を待った。

時間となり、堀田和夫氏と牟田春雄氏のトランペット伴奏に合わせた「国歌君が代」斉唱により慰霊祭は開始され、修祓、献饌、祝詞奏上に続き、藤田理事長が祭文を奏上した。

藤田理事長による祭文奏上

『祭　文』

今年も平和平穏のうちに、旧日本陸海軍全特攻隊戦没者の慰霊祭を、ここ靖国神社に於いて、皆様と共に、執り行えますことを、感謝いたします。今年もまた、このように多くの人びとが、ご多用中のところ、全国から集まってまいりました。

今年は、戦後も70年半ばとなり、戦友や直系の御遺族の皆様は少なくなってまいりました。そして、心ある若い人たちが、増えてきております。

今年はまた、特別の年になりました。あと一ヶ月余で、時代は、昭和、平成を経て、次の時代に変わろうとしております。皆様のお陰で、無事に、我が日本の新しい時代が開かれます。

とは申すものの、我国を取り巻く世界の情勢は、厳しさを増してきております。先の大戦で学び反省して出来た世界の国際連合、ＥＵ等、平和を維持する体制、枠組みは、冷戦構造が終わり、安定に向けて動くかに見えましたが、近年逆に、米、英、仏、露、中、独等の主要国の体制離れが顕在化し、綻びが生じているようにうかがえます。

我国周辺でも例外では無く、南北の朝鮮や中国等大陸近隣の国々と、我国との関係は、予断を許さない状況になってきております。

我国の国内においても、戦後七十余年の間に、国民の価値観が、故人の権利、利益中心に移り、農耕民族としての、良き助け合いの「和の精神」が、失われてきております。

その一方では、人類の科学技術は進歩して、個人の生活は充実し、生きる空間は、陸海空から、宇宙、サイバー等へと、大きく広がってきております。その新しい世界には、まだ新しいルールは、確立されておりません。それに伴う、精神面での進歩は、自己の利益追求にのみ集中して、むしろ退化しているようにさえ伺えます。

過去の人類の歴史を観れば、陸上、海上、航空へと広がるたびに、大混乱の争いが生じてきました。そして国際法が出来、秩序が生まれてきています。

私達は今ここに、また「新しい世界」を切り開きつつあります。従って、また過去のような混乱を、ひき起さないために、慎重に歩を進めていく必要がありましょう。

我国は、皆様方のご尽力の下、「耐え難きを耐え、忍び難きを忍んで」、今、歩んでいることを、忘れてはなりません。これは、皆様方の、私達に対する遺言と受け止めております。

その歩みには、固い信念と、決意が必要であります。厳しい道であります。私達が今歩んでいるその道は、「自由と権利、利益と楽、弱少を大切にしている道」であります。この道が、間違っているわけではありません。ただ、この人の世を、規律と義務、正しさ、犠牲を忘れ、逆に、悪事を働いた人、弱き人が動かしているような行き過ぎた世にすることは、生き物の世界として、永くは続かないと思われるのです。

「強く正しく生きて行くことこそ」が、創造主が私達に望まれている道でありましょう。その精神の鏡として、皆様方は、これからの新しい時代も、私達を、お導き下さいますようお願い申し上げ、その御導きに従うことをお誓いして祭文を終わります。

どうか安らかに、御眠りください。

平成三十一年三月三十日

公益財団法人
特攻隊戦没者慰霊顕彰会
理事長　藤田幸生

献吟は、吉野一心様、龍笛　逢坂龍信様により次の２首が奉唱された。

○勤王隊長　　山本　卓美　作
（昭和19年12月7日　オルモック湾で戦死）
七たびも生まれかわりて守らばや
わが美しき大和島根を

○第19金剛隊　　磯　部　豊　作
（昭和20年1月5日　リンガエン湾で戦死）
我も又還らぬ友の跡追いて
靖國宮の若桜とぞ散る

吉野一心様と逢坂龍信様による献吟奉唱

終わって、世田谷コール・エーデ合唱団による「夕焼け」と「ふるさと」の奉納演奏、続いて全員が「同期の桜」「海ゆかば」を斉唱した。

以上で拝殿における行事が終わり、参列者は本殿に昇殿して玉串を奉奠して、参拝した。

最後に、堀田和夫氏・牟田春雄氏によるトランペット演奏「国の鎮め」に合せて黙祷を捧げて慰霊祭は終了となった。

「同期の桜」「海ゆかば」斉唱

二　特攻勇士之像献花式

この後、遊就館前にある「特攻勇士之像」に対する献花が行われた。

御遺族代表　田辺さだ子様（八紘隊善家善四郎少尉の御遺族）御来賓代表　野口　清秀様（東京陸士五十七期生会代表）当顕彰会代表　杉山　蕃会長のお三方が献花し、参列一同は代表に合わせて礼拝した。

特攻勇士之像へ献花される代表者

以上を持って慰霊行事は全て終了し、靖國会館に於いての懇親会に移行した。

三　慰霊祭懇親会

平成31年３月30日（土）
12時40分～14時30分
於　靖國会館２階「九段の間」「田安の間」「玉垣の間」

懇親会が行われる靖國会館

慰霊行儀終了後、「靖國会館」会館２階の「九段の間」「田安の間」「玉垣の間」において懇親会が開催された。

石井事務局長の開式の辞に続き藤田幸生理事長より挨拶があった。

次に石井専務理事から平成30年度の活動状況の報告が行われたが、会員の減少傾向が続いているので皆様の御協力を頂きたいとのお願いがあった。

終ってご来賓代表、前高知県知事橋本大二郎様により乾杯が行われ、その後、懇談・会食となった。

前高知県知事橋本大二郎様

会の半ばには神社拝殿に於いても献奏した堀田和夫氏・牟田春雄氏によるトランペット演奏に合わせて全員により「海ゆかば」を斉唱し更に会場の雰囲気が盛り上がった。

前回は懇親会の時間が短く十分に懇談する時間が無かったと言うご意見があったので今回は時間を30分延長したが、その時間も近づいてきた。

話は尽きなかったが、御遺族代表　第23振武隊隊長　伍井芳夫中佐ご遺族　臼田智子様の音頭による乾杯をもって懇親会は閉会となり、第40回特攻隊全戦没者慰霊祭は全ての予定を終了した。

第23振武隊隊長　伍井芳夫中佐ご遺族　臼田智子様

宮崎縣護國神社「あゝ特攻勇士之像」奉納報告

理事　大穂　園井

平成31年３月28日（木）に宮崎縣護國神社で開催された「特攻勇士之像 建立除幕および竣工祭」に岩﨑副理事長と石井専務理事と共に参列したので報告する。

本事業は平成19年から開始し、宮崎縣護國神社で17体目の奉納となった。

宮崎県出身の特攻隊員は陸軍28名、海軍46名の計74名（特攻顕彰会調べ）である。野鳥たちの楽園と呼ばれるにふさわしい宮崎神宮の大きな森の中に鎮座する宮崎縣護國神社の境内に、「あゝ特攻勇士之像」は建立された。碑文にはこう記されている。

『大東亜戦争の末期、祖国の平和と国民を守る為には、体当たりで敵に向かう外に戦果を挙げる戦術なしと決断されて「特別攻撃隊」が編成された。

その作戦では、純真にして気力に満ちた腕利きの精鋭や若き勇士が我が身命を捧げて出撃し、散華された。

今私達は、この勇士の愛郷の心と熱情を受けて過ごしていることを忘れてはならない。

ここに特攻勇士之像を建立し、宮崎県出身七十余名を含む勇士への慰霊と感謝の誠を捧げるとともに、その尊き御心と偉業を後世へと顕彰する。

平成三十一年三月二十八日

特攻隊戦没者慰霊顕彰会

宮崎県護國神社

特攻勇士之像建立宮崎県委員会

特攻勇士之像奉賛有志一同』

隣には、宮崎出身で昭和19年10月25日に、特攻の第一陣としてフィリピンのマバラカットから出撃し散華された、神風特別攻撃隊敷島隊の永峰肇兵曹長（享年19歳）の辞世の句碑があり、まさに宮崎出身の特攻隊員を祀るにふさわしい場所である。

直前まで降りしきっていた雨がピタリと止み、式典には地元出身の国会議員をはじめ高鍋町長、遺族会、隊友会、偕行会、海軍甲飛会、宮崎県防衛協会や県内の陸上・海上自衛隊部隊長、テレビ宮崎の取材陣も含め70名を超す方々が参列し開式。見事な雅楽の生演奏に合わせて式は厳かに進められた。

特攻像の台座設計を含め短期間での建立に尽力された株式会社下森建装社長の下森康玄様（都城市）に感謝状が贈呈され、参列者からは特に大きな拍手が上がった。

宮崎神宮の杉田清秀宮司は「２年前に特攻顕彰会から話があった時には実現は到底無理であろうと思ったが、いきなり昨年から建立のための資金が集まり建設が具体的になった」と、建立のためにたくさんの力が集約し、短期間のうちに実現できた事について関係者へのお礼を熱く述べられた。

また特攻像の隣に建つ永峰曹長の碑に刻まれている辞世の句「南溟に（南方の大海に）　たとへこの身は果つるとも　いくとせ後の　春を想へば」を披露され、「この特攻像のお姿がたくさんの戦没者のよすがとなれるよう、今後祭典を続けていきたい」と述べられた。

続いて、特攻勇士之像建立宮崎県委員会三浦秀明会長（宮崎県隊友会会長）は「国を守るという心をないがしろにせぬようこの特攻像に最大の感謝と誠を捧げたい」と挨拶された。

最後に顕彰会の岩﨑茂副理事長が「75年前に始まり終戦までの間、空中特攻、水上特攻、水中特攻と、多くの方々が特

攻作戦で亡くなられている。ここ宮崎県からも陸海軍併せて74名の有意の青年が特攻で亡くなられた。私達はこの方々を決して忘れてはならず、感謝の念を持ち続ける義務がある」と挨拶。

陽射しが降り注ぐ中、竣工祭は滞りなく閉式した。

終了後、山桃色に輝く特攻像の前は手を合わせて記念撮影をする参列者であふれた。

ここを訪れる多くの方々がこの特攻像をご覧になり、特攻隊の存在を知り、特攻で亡くなられた勇士に思いをはせて下さることを切に望む。

開式の儀（上）除幕の儀（下）

三浦秀明会長ご挨拶

お礼を述べられる杉田清秀宮司

平成三十年度神雷部隊慰霊祭

編集長　金子　敬志

平成31年3月21日（木）に催行された「平成三十年度神雷部隊慰霊祭」に顕彰会を代表して参列させて頂いたので報告します。

1　概要

（1）場所

神奈川県鎌倉市山ノ内8

建長寺内「正統院」

（2）時間

受付開始　13時

慰霊祭　13時30分～14時

懇談会　14時10分～15時

（3）参列者

約50名

2所見

一昨年、昨年と天候が悪く慰霊祭は正統院の本坊内で行われたそうであるが、今年は朝方は雨であったが、最寄りのJR北鎌倉駅に着く頃は雨も上がり日が差す天気となり、碑前で慰霊祭が催行することが出来た。

JR北鎌倉駅前を出ると直前がバス停で約10分で建長寺山門前に到着する。

建長寺の入り口である総門を通り抜け正面にそびえる山門を右にみて左手の道を進むと正面に正統院への階段が見えてくる。階段の登り口の脇に「神雷戦士の碑」との案内板が立っている。階段を登ると正統院の山門の手前も案内板が有ってそれに従って進むと院の墓地があり、その奥の洞窟内に「神雷戦士之碑」が安置されている。

建長寺山門

慰霊祭はこの碑の前で執り行われた。

慰霊祭は湘南水交会山本副会長挨拶に続き、藤田理事長の追悼の辞を私が代読させて頂いた。引き続き、正統院雪（すすぎ）ご住職の読経の中、参列者全員が焼香をして戦没神雷戦士に哀悼の誠を捧げて慰霊祭は終了した。

その後、正統院の院内に場所を移し懇親会が行われた。

先ず湘南水交会副会長から無事慰霊祭を催行出来たことについてのお礼が述べられた。続いて、海軍を代表して当時整備をされたおられた竹下邦雄氏、海上自衛隊を代表して第4航空群司令金嶋浩司海将補からのご挨拶に続き、当顕彰会の代表として私もご挨拶させて頂いたので、顕彰会の沿革などについて話をさせて頂いた。

暫くの懇談の後、雪住職からのお話を頂いて懇親会は終了し散会となった。

懇親会でお話をされる雪（すすぎ）住職

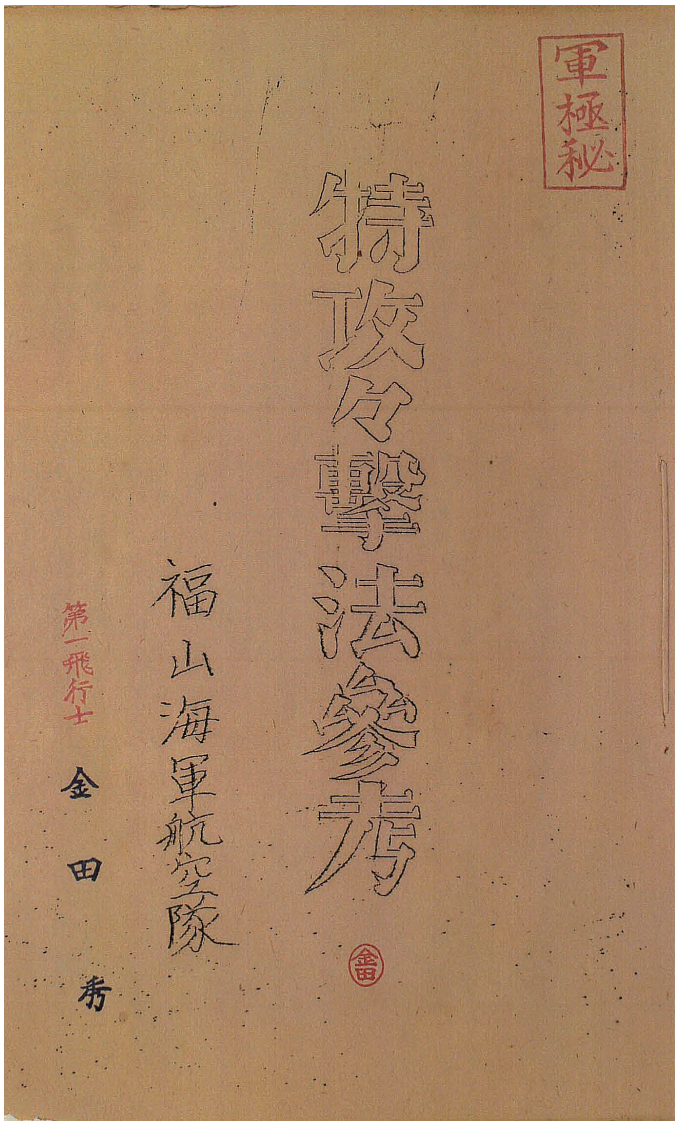
特攻々撃法参考（福山海軍航空隊）

編集長　金子　敬志

先日、匿名の方から興味深い資料の寄贈を受けました。表紙は左の写真の通りです。

16ページの小冊子で特攻のマニュアルと言うものです。

この種のものとしては陸軍の「ト號空中者必携」が知られていますが、海軍も作成していた事は余り知られていないと思います。



福山海軍航空隊は水上機の基地で、現在の広島県福山市鋼管町にありました。

この地に逓信省が昭和18年5月18日に福山地方航空機乗員養成所・福山高等航空機乗員養成所を開所しましたが、昭和19年3月、同養成所内に詫間海軍航空隊福山分遣隊が開隊、その後海軍は西側隣接地を買収し敷地を拡張するとともに施設の増設を実施、昭和20年3月1日、福山海軍航空隊に改編されました。そして終戦直前の8月10日には特別攻撃隊が編成されています。

また表紙にある「第一飛行士　金田　秀」について調べてみると「金田　秀」と言うお名前は海兵73期の名簿にありました。

海兵73期は昭和16年12月1日に入校、戦局の悪化に伴い在校期間が短縮され19年3月に卒業、航空要員は５００名が霞ヶ浦航空隊に入隊しましたが、更なる戦局悪化のため課程半ばのまま昭和20年2月28日飛行学生を修了し実戦部隊に配備されていますので、同一の方である可能性はあると思います。

以上からこの「特攻々撃法参考」は特攻作戦実施のために作成されてものと推測出来ます。

次ページから「特攻々撃法参考」の各ページのコピーを載せていますが、原本はカタカナ混り文章ですので、２ページ毎にひらがな混りにした文章を載せます。

今月号は紙面の関係で８ページまでとしています。以降の文章は８月号以降に掲載の予定です。

原本１ページ

一、要旨

(イ) 航空特攻戰ニ於テハ常ニ旺盛ナル企圖心ヲ以テ先制主動地位ヲ堅持シ積極果敢ナル攻擊ヲ決行シテ敵ヲ殲滅スルヲ要ス

(ロ) 特攻戰ノ要訣ハ我ガ企圖ノ秘匿ト神速果敢ナル機動力ノ発揮トニ依リ先制集中適時適所ニ熾烈ナル攻擊力ヲ発揮シ敵ヲ各個ニ殲滅スルニアリ

防衛ニ於テハ分散配備ヲ有利トスルモ攻撃ニ方リテハ兵力ヲ集中使用スルニ非ザレバ実効ヲ期シ難シ故ニ分散配備ニアル兵力ノ集散離合ヲ迅速適切ニシテ攻撃威力ノ適時適所発揮ニ努メザルベカラズ

故ニ航空部隊（空中部隊）ニ於テハ本要求ニ即應シ得ル諸準備（通信機関待機、基地移動、急速発進等）ヲ完整シ置クコトヲ肝要ナリ

(ハ) 奇襲ハ少勢ヲ以テ克ク優勢ナル敵ヲ撃滅スル最良ノ手段ナリ故ニ敵情ヲ速知スルト共ニ敵ノ追隨ヲ許サザル創意ト旺盛ナル企圖心トヲ以テ常ニ敵ノ意表ニ出ヅ其ノ不意ニ乘ズルヲ要ス而シテ之ガ実施ニ當リテハ克ク敵情ヲ確知シ特ニ敵ノ慣用戰法ヲ看破シ我ガ企圖ヲ秘匿スルト共ニ所要ノ準備ヲ完成シ天象地象ノ利用ト相俟ツテ神速果敢敵ノ不意不備ニ乘ジ一舉ニ最大ノ効果ヲ獲得スルニ努ムルヲ要ス

(二)特攻戦ノ成果ハ空中各指揮官ノ指揮ノ適否ニ左右セラルルコト甚大ナリ
故ニ空中各指揮官ハ旺盛ナル攻撃精神ト必死必勝ノ信念ヲ以テ率
先躬行指揮統率ノ完璧ヲ期スルト共ニ作戦ノ情況推移ノ洞察
判断ニ戦況ニ即應シ機宜ノ處断ヲ誤ラザルヲ要ス
(ホ)天象地象ハ航空作戦ニ至大ノ関係ヲ有スルヲ以テ巧ニ之ガ克服利用
ニ努ムルヲ要ス
故ニ空中ニ於テハ常ニ之ガ利用ニ依リ成果ノ発揚ニ資スルト共ニ険悪ナ
ル情況ヲ克服スルノ所信ヲ確保シ得ルヲ要ス

二、発進法

(イ)発進ハ急速ナルコト
攻撃前ニ待機ヲ令セラルルヲ以テ中隊長(区隊長)ハ従前充分ノ打合
セヲ行ヒ事前ノ研究諸準備ヲ完整シ得ル事肝要ナリ
(ロ)使用兵力、編制並ニ任務
(ハ)発進時刻、集合法及集合点(高度、旋回方向)
(ニ)進撃法(針路、速力、隊形、高度)
(ホ)展開、突撃

1ページ

一　要　旨

（イ）航空特攻戦に於ては常に旺盛なる企図心を以て先制主動の地位を堅持し積極果敢なる攻撃を決行して敵を壊滅するを要す

（ロ）航空戦の要訣は我が企図の秘匿と神速果敢なる機動力の発揮とに依り先制集中適時適所に熾烈なる攻撃力を発揮し敵を各個に殲滅するにあり

防御に於ては分散配備を有利とするも攻撃に於ては兵力を集中使用するに非ざれば実効を期し難し故に分散配備にある兵力の集散離合を迅速適切にし攻撃威力の適時適所発揮に努めざるべからず

故に航空部隊（空中部隊）に於ては本要求に即応し得る諸準備（通信、機関待機、基地移動、急速発進等）を完整しまること肝要なり

（ハ）奇襲は劣勢を以て良く優勢なる敵をせん滅する最良の手段なり

故に敵情を速知すると共に敵の追随を許さざる創意と旺盛なる企図心とを以て常に敵の意表に出て、その不意に乗ずるを要す、而して之が実施に当たりては良く敵情を確知しとくに敵の慣用戦法を看破し我が企図を秘匿すると共に所要の準備を完成し天象気象の利用と相俟って神速果敢敵の不意不備に乗じて一挙に最大の効果を獲得するに努るを要す

2ページ

（ニ）特攻戦の成果は空中各指揮官の指揮の適否に左右せらるること甚大なり

故に空中各指揮官は旺盛なる攻撃精神と必死必勝の信念を以て率先躬行指揮統率の完璧を期すると共に作戦の状況推移を洞察判断し戦況に即応し機宜の処断を誤ざるを要す

（ホ）天象気象は航空作戦に至大の関係を有するを以て巧みに之が克服利用に努るを要す

故に空中に於ては常に之が利用に依り成果を発揚に資すると共に険悪なる情況を克服するの所信を確保しあるを要す

二　発進法

（イ）発進は急速なること

攻撃前に待機を令せらるるを以て中隊長（区隊長）は従前充分の打合せを行い事前の研究諸準備を完成しおく事肝要なり

（１）使用兵力、編成並びに任務

（２）発信時刻、集合法及び集合点（高度、旋回方向）

（３）進撃法（針路、速力、隊形、高度）

（４）展開、突撃

原本３ページ

(5) 攻撃部署（攻撃配備、接敵方向、高度、目標配分、攻撃順序）
(6) 隊内対機信號（主要ノモノ簡單ナルヲ要ス）別表参照
(7) 敵機ト遭遇時ノ處置、敵警戒幕突破法
(8) 不時着基地敵ヲ見ザル場合及天候不良時ノ處置ヲ研究シオクコト
一、KTSB一三〇六五五番電
(10) 夜戦迎撃法ノ研究（電探凝晴紙ノ散布九〇度ノ旋回別動隊ノ電探凝晴紙散布）
(11) 攻撃目標ノ選定、攻撃点附近ノ敵情ノ研究
攻撃目標ハ揚陸前ノ輸送船、揚陸物点集散地
(12) 指揮官機故障等ノ為出発出来ザル場合ノ處置
(13) 搭乗員ハ身心ノ完璧ヲ期スト共ニ攻撃威力ノ全能発揮ニ最善ヲ盡スヲ要ス、己ガ兵器ハ常ニ自ラ点検整備シ出動ニ遺憾ナキヲ期スコト
出動前ニ安全解除ハ作動ヲ検スルコト
(15) 爆装時ノ夜間離水ニ於テハ特ニ風ニ正向スルコト、微風ト云ヘドモ横風ナル時ハ操作極メテ困難トナル
離水前ノ余裕ハ過ギル位採ルコト　上昇率ハ二乃至三米秒程度ナリ

(ニ)前進基地ニ於テハ常ニ敵機上空ニアルコトヲ銘記シ四周ノ見張ヲ特ニ厳ニシ尚自機ノ秘匿ニ努ムルヲ要ス

航空燈、座席計器燈ハ不安ナキ程度ニ光力調整シ対機対地信號等ハ簡単ニシテ無駄信號ヲ出サザルヲト

(ホ)出発ヨリ制形、整然トシテ出発スルハ錯綜ヲ防止シ連絡密ニシテ発進極メテ容易ナリ

(ヘ)攻撃隊ハ発進後所定ノ時刻、所定ノ地點ニ速ニ集合ス

三、進撃法

(イ)攻撃隊集合（編隊或ハ中隊）セバ速ニ進撃ス　集合ニ後レタル隊（機）アル場合ハ之ヲ待合セタル後進撃スルカ、其ノ儘進撃スルカハ情況ニ依リ、定ムルモノトス（空中指揮官）

(ロ)進撃中各隊ハ航行並ニ見張警戒容易ナル隊形トシ各隊連繋ヲ失セザル如クシ且機位ノ確保ニ努ムルモノトス

3ページ

（5）攻撃部署（攻撃配備、接敵方向、高度、目標配分、攻撃順序）
（6）隊内対機信号（主要のもの簡単なるを要す）別表参照
（7）敵機と遭遇時の処置、敵警戒幕突破法
（8）不時着基地　敵見ざる場合及び天候不良時の処置を研究しおくこと
／ＫＦＧＢ／一三〇六五五番電
（10）夜戦回避法の研究（電探欺瞞紙の散布、九〇度の旋回、別動隊の電探欺瞞紙散布
（11）攻撃目標の選定、攻撃店付近の敵情の研究
攻撃目標は揚陸前の輸送船、揚陸物点集散地
（12）指揮官機故障等の為出発出来ざる場合の処置
（ロ）搭乗員は身心の完璧を期すと共に攻撃威力の全能発揮に最善を画すを要す己が兵器は常に自ら点検整備し出動に遺憾なきを期すこと
出動前に安全解除は作動を検すること
（ハ）爆装時の夜間離水に於ては特に風に正向すること、微風と云えども横風なる時は操作極めて困難となる
離水前の余裕は過ぎる位採ること　上昇率は二ないし三米秒程度なり

4ページ

（ニ）前進基地に於いては常に敵機上空にある事を銘記し四周の見張りを厳にし尚自機の秘匿に努るを要す
航空燈、座席計器燈は不安なき程度に光力調整し対機対地信号燈は簡単にして無駄信号を出さざること
（ホ）出発より制形、整然として出発するは錯綜を防止し連絡密にして発進極めて容易なり
（ヘ）攻撃隊は発進後所定の時刻、所定の地点に速やかに集合す

三　進撃法

（イ）攻撃隊集合（区隊或いは中隊）せば速やかに進撃す　集合に遅れた隊（機）ある場合は之を待合せたる後進撃するか、其の儘進撃するかは情況に依り定むるものとす（空中指揮官）
（ロ）進撃中各隊は航行並びに見張警戒容易なる隊形とし各隊連携を失せざる如きとし且機位の確保に努むるものとす

編隊隊形ハ夜間ニ於テハ視認可能程度ニ開距離（現隊形ノ儘）トシ
見張ヲ厳ニシ、進撃ス
航空燈、座席、計器燈ハ情況ニ依リ適宜管制スルモノトス
(ハ) 高度ハ推測航法精度良好ナル高度ヲ選定シ尚夜間保安上
不安ナキ点ヨリ五〇〇米附近ヲ最良トス
(ニ) 電波管制ハ最重要施シ極力情報傍受ニ努ムルヲ要ス
(ホ) 編隊長機ハ常ニ正確ナル機位ノ確保ニ努ムルコト
夜間推測航法ハ極メテ至難ニシテ極力目標燈使用尾部締流
線使用等ノ締流測定ヲ演練スルヲ要ス
(ヘ) 攻撃隊隊定位置ニ進出スルモ敵ヲ発見セザル場合ハ触接機ノ方
位測定或ハ情況ニ応ジ捜索ヲ実施シ速ニ発見ニ努ムルモノトス
捜索目標発見セザル場合捜索打切時機ハ指揮官（空中）ノ
指令ニヨル
(ト) 視認ニ依ル敵発見ハ極メテ至難ニシテ夜間ハ五〇〇米附近最モ良好
ナリ該高度ニ於ケル敵電探発見距離ハ一〇〇理ナリ
(チ) 夜間ノ不安ナキ捜索高度ハ天候ニ依リ変更スルモ月夜又ハ晴天
ノ暗夜ニ於テハ二〇〇米以上

原本６ページ

四、接敵法

接敵ノ良否ハ攻撃ノ成否ニ甚大ナル影響ヲ及ボスモノナルモ天候地形及對勢ノ関係上所期ノ進入点ヲ得ハ困難ナル場合多キヲ以テ隠密迅速ニシテ有効適切ナル接敵ヲ行フニ努メザルベカラズ

(イ)接敵方向ハ對勢、視界、天象地象、敵ノ對空警戒網、防禦砲火ノ状況、地勢ヲ考慮ニテ決定スベキモノナルモ一般ニ隠密迅速ヲ最良トシ逆風ニテ敵ノ風上側ヨリ接敵スルヲ有利トス　故ニ搭乗員ハ常ニ風向風力ヲ知得シアルヲ要ス

(ロ)敵所在豫想地点ニ近接セバ附近天候視界、月光等ニ依リ接敵高度ヲ整ヘ敵ニ近接スルモノトス　攻点ハ基本通リ安全困難ノ場合多シアリ

(ハ)敵戦闘機ノ哨戒区域、高度ヲ考慮シ進入ニ際シ術中ニ陥ラザルコト肝要ナリ　概ネ目標ヲ中心トセル五粁圏外高度一〇〇〇米乃至三〇〇〇米ノ

(ニ)敵周辺ノ監視所、電探所等ノ疑アル地点ハ極力航過セザル如ク留意スルト共ニ山岳地帯ヨリノ奇襲的進入ハ有効ナリ

5ページ

区隊隊形は夜間に於ては視認可能程度に開距離（現隊形の儘）とし見張を厳にしつつ進撃する

航空燈、座席計器燈は情況により適宜管制するものとす

（ハ）高度は推測航法精度良好なる高度を剪定し　尚夜間保安上不安なき点より五〇〇米附近を最良とす

（ニ）電波管制は厳重実施し極力情報傍受に努むるを要す

（ホ）区隊長機は常に正確たる機位の確保に努むること

夜間推測航法は極めて至難にして極力目標燈使用尾部偏流線使用等の偏流測定を演練するを要す

（ヘ）攻撃隊予定位置に進出するも敵を発見せざる場合は触接機の方位測定或いは情況に応じ捜索を実施し速やかに発見に努むるものとす

捜索目標発見せざる場合捜索打切時機は指揮官（空中）の指令による

（ト）視認に依る敵発見は極めて至難にして夜間は五〇〇米附近最も良好なり該高度に於ける敵電探発見距離は一〇浬なり

（チ）夜間の不安なき捜索高度は天候に依り変更するも月夜又は晴天の暗夜に於ては二〇〇米以上

6ページ

四　接敵法

接敵の良否は攻撃の成否に甚大なる影響を及ぼすものなるも天象地象及び対勢の関係上所期の進入点〇得は困難なる場合多き

以て隠密迅速にして有効適切なる接敵を行うに努めざるべからず

（イ）接敵方向は対勢、視界、天象地象、敵の対空警戒網、防御砲火の状況、地勢を考慮して決定すべきものなるも一般に隠密迅速を最良とし追風にて敵の風上側より接敵するを有利とす　故に搭乗員は常に風向風力を知得しあるを要す

（ロ）敵所在予想地点に近接せば附近天候視界、月令等に依り接敵高度を整え敵に近接するものとす　攻撃は基本通り実施困難の場合多々あり

（ハ）敵戦闘機の哨戒区域、高度を考慮し進入に際し術中に陥ざること肝要なり　概ね目標を中心とせる五粁圏外一〇〇〇米乃至三〇〇〇米

（ニ）敵周辺の監視所、電探所等の疑ある地点は極力航過せざる如く留意すると共に山岳地帯よりの奇襲的進入は有効なり

(ホ) 敵ヲ視認セバ敵ノ全貌偵知ニ努メ敵ノ警戒薄キ力或ハ方位角良好ニシテ攻撃効果最大発揮スベキ方向ヨリ接敵スルヲ要ス

(ヘ) 前項ニ基キ其ノ精度並ニ情況ヲ考慮ニ捜索攻撃ノ形トスルヤ集団接敵トスルヤハ指揮官(区隊長)之ヲ定ムルモノトシ、一般ニ夜間ニ於ニハ機数少ク且早期分散スルハ相互ノ連絡ヲ困難ナラシムルヲ以テ敵ヲ捕捉スル迄ハ極力集団トシ爾後ハ一編隊毎ノ縦陣ヲ以テ接敵スルガ突撃前ノ混乱防止上有利ト思考サル

(ト) 敵戦闘機ニ對シテハ見張警戒ヲ最ニ早期発見ニ努メ攻撃効果ノ低下セザル程度ノ運動ニ依リ之ヲ回避突撃對勢ニ入ルヲ要ス

前方前上下方後方後上下方ヨリ概ネ攻撃ニ来ル、回避ハ左右ニ

(チ) 天象地象ノ利用法

(1) 下層雲量大ニシテ隙間少ナキトキハ下層雲ノ下際、敵戦闘機ノ攻撃ヲ受ケタル時ハ直ニ雲中逃避準備ヲ要ス

(2) 断雲ナル時ハ雲上ヨリスルヲ有利トス、雲下ナル時ハ敵戦闘機ノ奇襲並ニ探照燈照射発見容易ナリ

(3) 山岳、煤煙、黒雲、ミスト等ハ之ヲ背景トスレバ敵ヨリノ発見困難トナリ白雲ハ之ニ向ヒテ進入スレバ前方ノ敵戦闘機ノ発見容易ナリ

雲「ミスト」ハ極力利用スルヲ要ス

(4) 月明、薄暮ハ各ノ反対側ヨリ接敵スルヲ要ス

(1) 敵発見接敵ニ於テハ速ニ機上安全解除把柄解除トナスコト

特ニ敵発見時ノ搭乗員ノ気分ハ極メテ緊張シ過ギ逆上スル如クナルヲ以テ充分ナル腹ト日頃ノ研究訓練ヲ最必要トス

(2) 攻撃威力発揮ノ妨害、被害局限等ヨリ敵ハ従来煙幕展張ヲ行フ以テ彼我ノ對勢ト其ノ趨向並ニ風向風力等ヲ考慮シ迷ハザルコト肝要ナリ

TJB 機密第一七一三三一番電参照

7ページ

（ホ）敵を視認せば敵の全貌偵知に努め敵の警戒薄きか或いは方位角良好にして攻撃効果最大発揮すべき方向より接敵するを要す

（ヘ）前項に基き其の精度並びに情況を考慮し捜索攻撃の形とするや集団接敵とするやは指揮官（区隊長）之を定るものとし、一般に夜間に於いては機数少なく且早期分散するは相互の連絡を困難ならしむるを以て敵を捕捉する迄は極力集団とし爾後は一編隊毎の縦陣を以て接敵するが突撃前の混乱防止上有利と思考さる

（ト）敵戦闘機に対しては見張り警戒を厳とし早期発見に努め攻撃効果の低下せざる程度の運動に依り之を回避突撃態勢に入るを　　要す

前方、前上下方、後方、後上下方より概ね攻撃し来る、回避は左右に

（チ）天象地象の利用法

（1）下層雲量大にして隙間少なきときは下層雲の下際、敵戦闘機の攻撃を受けたる時は直に雲中逃避の準備を要す

（2）断雲なる時は雲上よりするを有利とす、雲下なる時は敵戦闘機の奇襲並びに探照燈照射発見容易なり

（3）山岳、煤煙、黒雲、ミスト等は之を背景とすれば敵よりの発見困難となり白雲は之に向いて進入すれば前方の敵戦闘機の発見容易なり

8ページ

雲「ミスト」は極力利用するを要す

（4）月明、薄暮は各の反対側より接敵するを要す

（リ）敵発見　接敵に於いては速やかに機上安全解除把柄解除となすこと

特に敵発見時の搭乗員の気分は極めて緊張し過ぎ逆上する如くなるを以て充分なる腹と日頃の研究訓練を最必要とす

（ヌ）攻撃威力発揮の妨害、被害極限等より敵は従来煙幕展張を行う以て彼我の対勢と其の趨向並びに風向、風速等を考慮し迷わざること肝要なり　ＴＢＦ　機密空中一七一三三一番電参照

呉・江田島研修

編集長　金子敬志　会　員　青木和子
会　員　原　知嵩　会　員　髙橋　暢
評議員　及川昌彦

特攻隊戦没者慰霊顕彰会は会員の識能向上のため平成31年２月28日（木）～３月１日（金）の間、呉・江田島地区の史跡研修を実施しましたのでその概要と所見を記します。

一　研修の概要

（１）参加者
藤田幸生顕彰会理事長以下22名

（２）研修場所
ア　２月28日
（ア）海上自衛隊呉地方総監部
（イ）旧海軍地下作戦室
（ウ）大麗女島
イ　３月１日
（ア）陸軍㋹史跡（慰霊行事）
（イ）海上自衛隊幹部候補生学校及び第１術科学校
（校内見学及び教育参考館）
（ウ）Ｑ基地跡（慰霊行事）
（エ）特潜碑（慰霊行事）
（オ）Ｐ基地跡

（３）行動内容
本研修は当初は30年７月初旬に計画されたものであったが、直前に発生した「平成30年７月豪雨」のため延期となったものである。

２月28日は定刻の午後一時十分に全員待合せ場所のＪＲ呉駅に集合、参加者を確認後タクシーに分乗して海上自衛隊呉地方総監部に向かった。

総監部は旧海軍の呉鎮守府と同じ場所にある。到着後、当日は呉地方総監が公務のため御不在なので、総監部幕僚長小峰海将補に理事長以下代表者が表敬訪問をした。

表敬訪問終了後、部屋を移して参加者全員に呉地方総監部、呉鎮守府についての説明が実施された。総監部庁舎は戦前からのものと思っていたが、庁舎は空襲のため外壁を残して内部は焼失、戦後に再建したものと聞き、巧みな修復に感心した。その後、庁舎内見学、続いて旧海軍地下作戦室を見学した。地下作戦室は壁のセメントの厚さを見える所があり、１ｍを超える厚さから頑丈な構造であることが伺えた。

総監部地区の見学の後、用意された交通艇で大麗女島に向かった。大麗女島は現在は海上自衛隊の弾薬庫として使用されているが、大戦中は軽油やガソリンを備蓄する燃料庫であり、末期には特殊潜航艇「蛟龍」が生産されていたのでその遺構の見学である。島には以前は隊員が常駐していたそうであるが、使用頻度が少なくなったため現在は無人である。

トンネルが７本掘られていて、その一部は弾薬庫として使用中であるが、幾本かは物品置き場などに使用されていて入る事が許可された。残念ながら蛟龍の生産設備は撤去されていたが、トンネルの長さは約50ｍ程度であり、蛟龍１基が収まる長さであった。以上で第一日目の研修は終了した。

二日目は借上げバスで呉駅前を出発、フェリーで江田島の切串に向かい、江田島北端の幸之浦にあった陸軍㋹艇訓練基地跡を訪れた。史跡らしきものは殆ど無かったが「海上挺進隊　戦没者慰霊碑」が建立されているので、参加者全員は原知崇会員の追悼らっぱ吹奏に合せて黙祷を捧げた。

この後、海上自衛隊幹部候補生学校及び第１術科学校の見学に向かった。

同地は旧海軍兵学校の施設の多くを現在も使用しており、当時の様子を色濃く残している。

到着後、幹部候補生学校長、第１術科学校長に表敬をすると共にお二人より現状説明を頂いた。

説明終了後、「大講堂」を見学させて頂いた。大講堂は旧海軍時代から現在まで使用されており、卒業式等に使用されている。

大講堂見学後、校内見学グループと「教育参考館」に保存されている特攻隊の遺書を閲覧するグループに分かれ研修した。

昼食は隊員の食事を体験喫食させて頂いた。丁度当日は金曜日であったのでカレーであった。大変おいしく、お代わり自由との事で２杯目に挑戦する方もあった。

昼食後、学校を後にし倉橋島にある特殊潜航艇関連の史跡の研修に向かった。

初めに訪れたのは同島大迫にあった「Ｑ基地」跡である。ここには「特殊潜航艇基地　大浦突撃隊大迫支隊跡碑」が建立されているので、「海上挺進隊 戦没者慰霊碑」と同様に追悼らっぱ吹奏と黙祷を捧げた。

続いて同島音戸町八幡山神社にある「嗚呼特殊潜航艇碑」を訪れた。この碑は特殊潜航艇関連の戦没者を慰霊するものであり、先と同様に慰霊行事を行った。

最後に訪れたのは「Ｐ基地」跡である。

ここでは特殊潜航艇搭乗員の訓練と呉海軍工廠分工場が置かれていて特殊潜航艇の製作が行われていた。今は広島県立水産試験場と公園になっており、往時の様子を伺う史跡は殆ど無いが「特攻基地大浦崎（Ｐ基地跡）」の碑が公園入口近くに建立されていた。

以上で研修は無事終了、充実した２日間であった。

（金子　敬志　記）

二　参加者の所見

１　【２／28呉編】

青木和子

春間近の雨の朝、いつもより少し遅目に起きて身支度を整える。集合は呉駅13時10分だ。

飛行機・新幹線・夜行バス等、参加者は様々な方法で集合する。研修場所が場所だけに、まるで入隊みたいだね、と、ふと考えて可笑しくなる。

新幹線の窓に叩きつけていた雨は次第に小降りになり、低かった雲も散って、広島に着く頃には雨は完全に上がっていた。

定刻より随分早く呉駅に着いたので、お気に入りの場所へ行く。亀山橋からＪＲ呉線を横切り、中央桟橋ターミナルへと続く境川と川沿いの蔵本通り。見慣れた景色と空気に呉を感じる。呉駅へ戻って参加者の皆さんと合流、全員の集合を待って行程の説明を受け、最初の研修地・海上自衛隊呉地方総監部の青山門へ移動した。

呉地方総監部庁舎（旧呉鎮守府庁舎）

海上自衛隊呉地方総監部第一庁舎（旧呉鎮守府庁舎）は旧軍港四市のひとつとして日本遺産の認定を受けており、威風堂々とした造形の美しさは日本屈指の煉瓦建築だ。庁舎は１９０６年５月12日に呉鎮守府として起工、翌１９０７年５月31日竣工。その後１９４５年７月２日空襲により被災、同年11月30日鎮守府閉庁、１９５６年12月14日呉地方総監部として開庁という歴史を持つ。地下１階、地上２階、延べ１９９０㎡、外壁はイギリス

呉地方総監部庁舎海側

積み、玄関周辺には御影石、馬車止もそのまま残っており、２階両側には柱頭に桜を彫刻した石柱、中央部にはドームを配し、ペディメントには桜と錨のエンブレムが金色に輝いている。

特筆すべきは、この建物には表裏がなく、陸側と海側の両面がファサード（建物正面）という点だ。これは上級士官が、陸側からは自動車（馬車）で、海側からは足下の桟橋に内火艇で乗り付けることを想定してあり、まさに海軍ならではの仕様だ。ちなみに先ほど通った青山門は陸側の正門で、海側には城山門という正門がある。

庁舎に入り石張りのエントランスホールを通って赤い絨毯の敷かれている正面の階段を上る。

総監部庁舎２階

踊り場の大きなアーチ窓は下側が格子、上側が組子模様に刷りガラスという凝ったデザインだ。２階の廊下も赤い絨毯が敷き詰められ、高い天井に白い壁、磨き上げられたダークウッドの腰板が奥行きと品格を演出している。

まるで宮殿の様な優雅な造りだが、廊下壁には歴代鎮守府司令長官の金のネームプレート、貴賓室金屏風前には向かって左に日章旗、右に自衛艦旗の交差掲揚、さらに入口上部には東郷平八郎元帥の「柔能制剛」（柔能く剛を制す）の筆という硬派な海軍の一面が見事に調和している。

一行は会議室に集まり、各々名札の場所に着席した。小峯幕僚長様がご挨拶され、続いて広報担当の方から旧鎮守府庁舎・旧地下作戦室の概要、及び本日の見学についてスライドを使っての説明がある。

その後庁舎前（陸側ファサード）に移動して集合写真を撮影、再び庁舎内に戻り本格的な引率による見学が始まった。

まずは先ほど上った正面階段を地下へ下る。頭上を複数の配管が走り、いかにも地下という様相で豪華さは感じられない。だが火災時には煙を逃がす道としてアーチ型の天井にするなど当時の建築技術の粋を集め、細部にわたって緻密に設計されている。

再度貴賓室を見学後、庁舎外（海側ファサード）へ。建物の形状が陸側とは違いコの字型になっている為、一見小振りに見え、思わず窓の数を数えてしまう（もちろん同じです）。先程の踊り場の大きなアー

海側ファサード

チ型窓は海側正面玄関の真上に位置し、入り口には金プレートに庁舎由来が刻まれ、掃海艇ははじまの時鐘が設置されている。脇には地下作戦室の入り口があり、深く続く階段が沖縄の旧海軍司令部壕を思い出させた。

庁舎前にて天皇陛下お手植えの松がある日本庭園を観賞後、大階段前を通り（天皇陛下をお迎えする為に造られたが壮大過ぎて「陛下をここまで上らせるわけにはいかない」と使われなかった）、かっては海だったという城山グラウンド側へ坂道を下る。

呉鎮守府司令部地下壕正面入り口

この場所は戦国時代、野間水軍を擁する野間氏が築いた城山城跡らしく、坂道の所々に埋もれかけた石積みが残っていた。地下作戦室はこの坂を下り切った所にある。頑丈なコンクリート造りで蔦の絡まる日本海軍呉鎮守府司令部地下壕（旧地下作戦室）は庁舎南側の崖を切り開いて建設された。地下壕は米軍機による初の本土空襲があった１９４２年に旧海軍が設計、１９４５年春に完成した。

【案内板の説明】

『昭和17年、日本本土は米軍機による初空襲を受け、昭和19年頃からは連日のように空襲を受けるようになり、爆撃の被害を避けるため日本海軍の地上施設は地下に建設されるようになった。

当該施設は、呉鎮守府司令部庁舎（現呉地方総監部庁舎）裏側の崖の斜面を切り開いて建設されており、昭和17年設計、昭和18年頃に着工、昭和20年頃に完成し、「地下作戦室」と呼ばれていた。また、空襲による被害を最小限とするため、当該施設完成後は重要書類等も「地下作戦室」で保管されるようになった。

「地下作戦室」の１階には会議室・発電機室・換気施設・排水施設、２階には通信室・事務室・映写室・休憩室があり、通信室には大本営・連合艦隊司令部・呉鎮守府管下の各要所等との電信・電話線が引かれ、「地下作戦室」１階中央正面の壁一面には西日本の作戦図が掲示され、外部との開口部（窓・出入口）には封鎖可能な鉄製扉が設置されていたようである。

また、地下施設への連絡用として地下通路が整備されており、「地下作戦室」の奥に見える鉄製の扉を開けると、呉地方総監部庁舎裏側にある出入口と繋がっている。昭和20年7月、米軍機による呉市への空襲により、呉鎮守府司令部庁舎も外壁のみを残して焼失したが、重要書類等は「地下作戦室」に保管されていたため爆撃の被害を受けず、そのため呉鎮守府司令部は終戦まで作戦その他要務を支障なく遂行できたと言われている。』

地下壕内はアーチ型の天井でちょっとした講堂くらいの広さがあり、敵機襲来時には厚さ約１・５ｍの壁に張られた西日本全域の巨大な地図の豆ランプが点灯する仕組みになっていた。現在は全て撤去され、奥にぽつんと「開かずの扉」と言われている錆びた鉄製の扉があるのみだ。先程見た深い階段はここに通じているが、内部通路は崩落が進んでいる為、無理に扉をこじ開けることはできない。これ以外にも地下通路は何本も掘られており、呉駅まで到達させる計画だったと言われている。２階の小部屋は通信室等で、電話交換室跡の天井はコルクでできている。占領時代の名残で、ドアは派手な緑色に塗り替えられていた。

地下作戦室見学後、隣にある殉職隊員慰霊碑に拝礼し、旧軍需部倉庫へ向かった。旧海軍時代に軍服を収容する倉庫として４棟が建てられ、内３棟が現存している。暫く外周を見学した後、艦隊桟橋待機所を経て交通艇にて次の研修地大麗女島へ移動した。

かつて大麗女島には７本のトンネルがあり、燃料の備蓄が行なわれていた。終戦間際にはトンネルの一部を改造・拡張して特殊潜航艇「蛟龍」（甲標的丁型）の地下工場となり，戦後は占領軍の弾薬庫として使用される。

現在は海上自衛隊の管理下にあり、潜水訓練等で使われたこともあったが、今はそれも無く、番犬として放たれていた犬も撤収した為、島は野鳥が大量繁殖している。トンネルのひとつを抜け島の対岸に出ると、旧海軍の見張所が置かれていた小麗女島と灯台が見えた。足元には小さな砂浜があり、まるでプライベートビーチの様だ。

大麗女島のトンネル

大麗女島の見学が終わり、交通艇で海軍本来の表玄関へ帰投する。呉港内は天皇陛下御在位三十年を祝う満艦飾を施した艦艇が並び壮観だ。名残惜しい軍港の風景を後にして、船は基地桟橋に着岸した。本日の呉研修はこれで終了となる。

小峯幕僚長様はじめ自衛隊の方々はとても礼儀正しく、また説明・案内も丁寧かつ親切で非常に分かり易かった。写真でしか見たことの無かった場所へ行き、通常目にすることができないものを見、たくさんの興味深い話を聞き、この街に息づく歴史の重みや海上自衛隊に引き継がれている誇りと伝統に頼もしさを感じる素晴らしい研修になった。

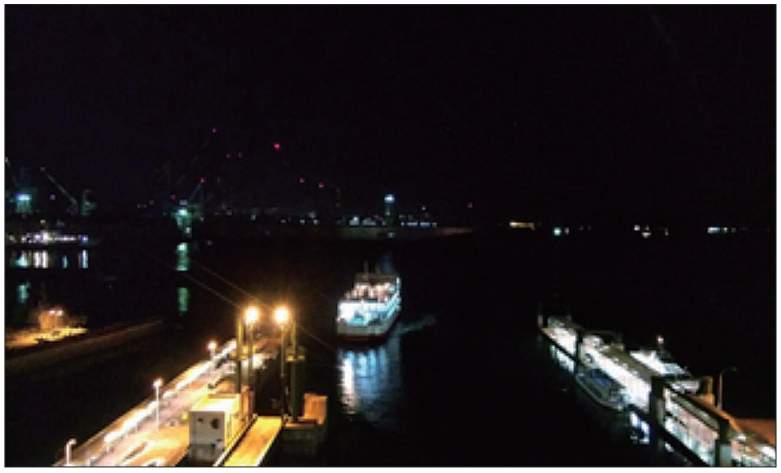
今回の研修を企画・実行して下さった役員の皆様に心から感謝致します。本当にお疲れ様でした。

夜には懇親会が設けられ小峯幕僚長様、総務課長様のご臨席を賜り、歓談に花が咲いた。

楽しい時間はあっと言う間に過ぎ、解散後は電灯艦飾を見ようとみんなで呉中央桟橋ターミナルの展望台に上がってみる。電灯艦飾は遠くかすかに見えただけだが、港の灯りは色とりどりでとても綺麗だ。

今日はまだ２月だというのにとても温かい。みんなと別れ優しい風に吹かれながら境川沿いの遊歩道を歩く。この街はゆっくりと柔らかく時が流れている気がする。

多分私はこの街がとても好きなのだ。



呉港の夜景

2　【3／1　陸軍㋹史跡】

原　知嵩

江田島での最初の研修地は江田島の広島に向いた側、幸之浦（こうのうら）の海岸沿いに建てられた海上挺進戦隊戦歿者慰霊碑である。

この付近の地形は少し湾状となっており、静かな海の向こうには穏やかな色彩で似島が望めた。

海上挺進戦隊戦歿者慰霊碑

挺進とは本隊から先んじて進むことを意味し、わが陸軍では偵察、先遣隊などの他、現代でいう特殊部隊としての意味合いがあった。混用されがちだが「挺身」は物事を成すにあたって自ら身を投げ出してすることであり、ニュアンスが異なる。海上挺進戦隊は四式肉薄攻撃艇「マルレ」（以下㋹とする。）を用いた陸軍水上特攻部隊であり、昭和十九年七月より研究が開始され、仮編制を経て九月に十個戦隊の編制完結がなされた。その場所こそがこの江田島幸之浦にあった「船舶練習部第十教育隊」だった。

㋹艇は海軍の「震洋」艇と近似すること、本土決戦用の秘密部隊として編成されたこと、また他の陸軍船舶部隊と混同されやすいことから戦後においても認知度が低いとされるが、戦局の起死回生を図り、最終的には三千艇が配置される大計画だった。

㋹は全長５・６メートル、全幅１・８メートル、満載排水量約１・５トン、自動車用六気筒ガソリンエンジンを搭載したモーターボートの後部に１個の２５０キロ爆薬を搭載して、23～25ノットの速力を出せたとされる。艇体材質はベニヤだった。乗員は一名の他、指揮艇には指揮官が搭乗できた。乗員は拳銃と軍刀を携行する。緑色の迷彩を施された外観から部内では「アマガエル」と呼称されたと謂れる。

「㋹」と「震洋」と両者を合わせて「マル八」として統合運用が目され、敵上陸部隊を目標として爆薬を積んだ多数の小型艇をもって一斉に突入し一艇一船を屠るの戦法は震洋と同じであったが、本来「㋹」の開発意図は特攻兵器ではなかった。「震洋」と異なり艇の外部に爆薬は装備され、輸送船の近くまで突入し、爆雷を投下して離脱する構想であったが、押し迫った情勢の中、戦果を確実にするためには特攻を正規の戦法とし、体当たりによる攻撃が前提とされるようになっていった。

江田島で昼夜分かたぬ猛訓練を受けた㋹要員は志願による少年たちだった。十五歳から二十歳未満の下士官候補者であった船舶特別幹部候補生が主体となり、その他選抜された将校、下士官の精鋭で編成されていた。一個戦隊は百四名で、㋹百隻で編成されたという。三十戦隊までが編成されると台湾、沖縄、フィリピンへ進出、昭和二十年一月にはリンガエン湾、三月以降の沖縄戦において実戦投入され、震洋と併せての敵艦船の撃沈および損傷の米側記録が残っている。彼らへの戦局挽回への期待は高く、その後も江田島における編成は続き、三十一戦隊以下十二個戦隊が本土決戦部隊として九州、四国、紀州に展開した。さらに、四十一戦隊以下の十一個戦隊は編成を完結しな

いままこの地で訓練中に終戦となったが昭和二十年八月六日朝、部隊の眼前とも言える広島に米軍機により原爆が投下された。幸い教育隊には被害がなく、大発など持てる本来の海上機動力を存分に活かし原爆投下後の広島市内へ進出、身を晒して国民の救出、救援作業に当たった。特別攻撃隊員として敵を斃すための教育を受けていた彼らの最後の任務は、国民を助けることだった。しかしながら彼らには被爆者手帳が交付されず、戦後も苦労をした隊員が多かったという。同年十月、㋓を焼き、部隊は解散した。

この慰霊碑は㋓特別攻撃に散華された同隊隊員、また艇を失い、艇を捨てて陸戦に転じて散った隊員、一六三六名を顕彰し、かつ慰めるために建てられた。

研修団は黙祷を捧げ、ラッパ「國ノ鎮メ」を献奏した。

らっぱ献奏

海を背にした慰霊碑の前に立つと、特殊船艇勤務者胸章が刻まれ、碑の横には赤く錆びた大発の錨が置かれているのが目に入る。視野を海に転じれば、湾内を駆ける小さな㋓の姿をそこに思い描かざるを得ない。研修参加者は黙祷を捧げた後、それぞれ近傍に何か教育隊の痕跡が無いかと見回したが、それを匂わせるようなものは判らなかった。

3 【教育参考館】

高橋　暢

一　概要

パルテノン神殿を思わせる巨大な六つの柱が特徴的な近世古典様式鉄筋コンクリート造の教育参考館は、帝国海軍の歴史と伝統を保存し海軍兵学校生徒の自己修養と学術研鑽の資とすることを目的に、昭和11年（１９３６年）、兵学校卒業生の積立金や一般有志の寄付によって建築されたもので、現在は海上自衛隊の展示も追加され、海上自衛隊員の精神修養の場として運用されている。

建物の中心には『東郷元帥室』、『戦公死者名牌室』を擁する中央階段ホールがある。ホールは天井の採光窓からの柔らかい光によって白く静かに明るく、中央階段に敷かれた赤絨毯のコントラストと相まって厳かな雰囲気を醸し出している。

階段を上がると正面に『東郷元帥室』、その内部に東郷平八郎元帥の遺髪を安置する『遺髪室』がある。『遺髪室』の正面扉は観音開きとなっており、扉表面には長崎平和祈念像を制作した北村西望の彫刻による日本海海戦の主要場面のレリーフが施されている。残念ながら『遺髪室』の内部を見る事はできないが、東郷元帥の遺髪は元帥が生前愛用した硝子コップ内部を真空化して安置されているのだそうだ。『東郷元帥室』の壁は山口県秋吉台産出の天然大理石であり、これは全て当時の地主から寄贈されたものだと言う。『東郷元帥室』を背にして立つと、階段ホールを挟んでちょうど反対側の壁に大きな黒い大理石盤が三枚掲げられているのが見える。海軍兵学校出身戦没者の銘碑を掲げた『戦公死者名牌室』である。当初兵学校大講堂の玉座に面して奉掲されていた『戦公死者名牌』が、教育参考館建築にあたりここに新設されたのだそうだ。『戦公死者名牌室』の中央上部には、高松宮喜久子殿下の歌が掲げられている。

海はらに　はた大空に　散華せし
きみら声なく　行く春やへし

妃殿下の夫高松宮宣仁親王殿下は、海軍兵学校第52期として江田島に学ばれた。兵学校とは浅からぬ縁で結ばれた妃殿下の海兵出身戦没者に対する特別な想いが推し量られる。

中央階段ホールを囲むように展示室が配置されている。二階展示室には帝国海軍の黎明期から各戦役の様々な資料がある。ここでその全てを紹介する事はできないが、勝海舟の書、旅順閉塞作戦の広瀬武夫中佐、「勝って兜の緒を締めよ」で有名な東郷元帥の『連合艦隊解散之辞』、潜水艇訓練中に殉職した佐久間勉大尉の遺書、横山大観画の『正気放光』、そして大東亜戦争における特別攻撃隊隊員の遺書などの貴重な資料が展示されており、帝国海軍の歴史が先人達の努力と忠義と犠牲の上に成り立ってきた事が分る。

一階展示室には戦艦長門の艦首紋章、日露戦争の陸海将官の書を集めた『瞻之』、入口ホールを挟んだ別室には海軍兵学校、海上自衛隊の歴史などの資料があり、限られた時間ではあったが、帝国海軍、海上自衛隊の歴史を学ぶ事ができた。教育参考館は第二・第四火曜日を除いて一般に見学する事ができ、年間で約七万人の見学者があるという。

二　所見

教育参考館は、大正14年、当時の兵学校長谷口尚真中将が自ら収集した記念品や訓育資料を第二生徒館の一階下に陳列したことに端を発する。昭和９年に海軍省教育局より『海軍兵学校教育参考館建設甚金に関する件提案』が関係者に配布され、海軍および一般有志の寄付を得て昭和11年に新教育参考館の完成に至った。新教育参考館の設計が始まって間もない昭和９年５月に死去した東郷元帥の遺髪は当初大講堂階上正面に安置されていたが、急遽設計が変更されて現在の『東郷元帥室』が設けられる事になった。当時の兵学校長及川古四郎大佐が起草した『元帥遺髪安置の精神に就て』によると、「東郷元帥は帝国海軍の最も理想とする偉大な先輩であり、最も親しみをもって影響を受けるべき『我らの聖将』であるのだから、元帥の遺髪は、家族が神棚や仏壇に祖先を祭るがごとく常に身近に存在を感じるように（「在すが如く」）安置するべきである」としている。帝国海軍にとって東郷元帥がいかに特別な存在だったかが分る。

新教育参考館完成直後に入校した海兵第67期から、入校特別教育として第一種軍装を着用しての『東郷元帥室』、『戦公死者名牌』の参拝が始まり、その後恒例となった。兵学校生徒の青春を描いた１９６９年公開の大映作品「海軍兵学校物語　あゝ江田島」には、本郷功二郎演ずる小暮中尉が回天特攻出撃を前に『東郷元帥室』を参拝するシーンがあり、当時の兵学校生徒や卒業生がどのように教育参考館を訪れたかを知る上で参考になる。彼らは皆、靴を脱いで中央階段を上がり『東郷元帥室』の前に立った。帝国海軍の父とも言える東郷元帥を前にし、諸先輩の遺志を双肩に感じるとき、先人の忠烈と殉国の志を模範とし、帝国海軍の伝統と精神を継承していく責任と自負に心を熱くした事だろう。その伝統と精神は、今、海上自衛隊幹部候補生学校、第一術科学校にも受け継がれ、将来日本の国防を担う学生達の心の道場として活用されているという。教育参考館は昔も今も若き海の防人達の精神の拠り所であり続けている。　（了）

※以下を参考にしました。

『海上自衛隊第一術科学校ホームページ』
『なにわ会ホームページ』
『海軍兵学校物語　あゝ江田島』
（大映株式会社１９６９年）

4　【Q基地・p基地】

評議員　及川　昌彦

研修二日目、江田島の海上自衛隊・第一術科学校及び幹部候補生学校見学後、倉橋島大迫地区にあるP基地、Q基地跡に行きました。

P基地は、昭和17年10月から呉海軍工廠分工場の建設が始められ、翌18年3月から特殊潜航艇（甲標的）製作が開始されました。同時に特殊潜航艇搭乗員の養成が始められました。昭和19年4月からは特四式内火艇（水陸両用キャタピラー装備車）の訓練が行われました。特4式内火艇は元は貨物輸送用でしたが、サンゴ礁に囲まれた泊地に停泊する米軍艦艇を、夜間、キャタピラーを使用してサンゴ礁を乗り越えて泊地内に侵入して奇襲攻撃する目的で魚雷を装備するなどの改装されましたが、性能が不十分なため作戦は中止されています。

経路の都合でQ基地から回る事になりました。Q基地は昭和20年3月訓練員の増員に伴い、P基地に収容しきれなくなった２０００名の特殊潜航艇訓練員が大浦突撃隊支隊と改称され訓練基地となりました。当時は六つの兵舎があったようですが海岸沿いに「特殊潜航艇基地」という碑が残るのみで当時の面影はわずかに訓練員が小型船舶などで対岸のP基地に通うのに使用した桟橋の残骸らしきものだけでした。

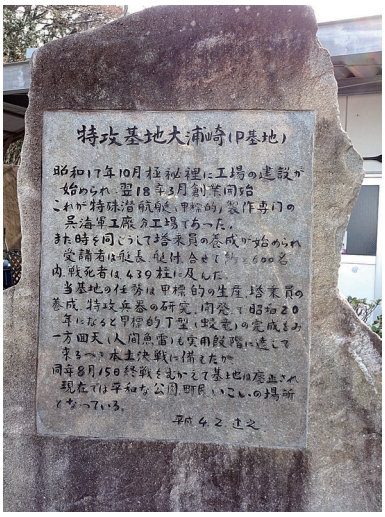
碑の周囲は綺麗に清掃されていて、地元の方々がお守りしている事が感じられました。

参列者は碑の前に整列して原知崇評議員持参の昭和五年制定の九〇式の海軍喇叭による「水漬く屍」の吹奏で黙とうを捧げました。

今回の研修最後の研修地であるP基地は先に記したように大浦崎特殊潜航艇基地として特殊潜航艇の生産。整備、搭乗員訓練が行われていました。人間魚雷回天も一時期このP基地で訓練していました。

基地には格納庫、吊り揚げ場、組み立て工場、蓄電池充電場、魚雷格納庫や多数の兵舎が建てられてました。このP基地で２６００名の搭乗員が養成され４３９名が戦死しました。現在は大浦崎公園となり当時の建物は県立水産海洋センター内に散在してました。一般に見学する機会の無いP基地・Q基地ですが大浦崎の地名から当初O基地と呼称しようとしてましたがあまりにも単純で防諜上の問題からアルファベットのOの次のPからP基地としてその次のQからQ基地と呼ばれるようになったとのことです。

「特殊潜航艇基地」碑で黙祷を捧げる参列者



特攻基地大浦崎（P基地）の碑

海上挺進第三戦隊及び基地第三大隊

会員　中溝　二郎

海上挺進第三戦隊は、昭和十九年八月上旬に小豆島で仮編成し、豊島基地で訓練に入り、宇品において九月一日付暁（後に球となる）第一六七七九部隊として正式編成となり、戦隊長に陸士五三期の赤松嘉次大尉（二十年六月少佐となる）、第一中隊長中村彰少尉、第二中隊長富野稔少尉、第三中隊長皆本義博少尉（何れも陸士五七期）、副官として張間興国少尉がおり、群長は船舶幹候隊出身一〇期の見習士官（二十年一月に少尉となる）、戦隊付き下士官一名の他、戦隊員は全員特幹一期生であった。

戦隊は九月三日に、休暇を終えて幸ノ浦基地に集合した後、此処で正式に動員完結。その主力は九月十日に宇品を出港し、鹿児島港を経由して同月の二十六日には、沖縄県島尻郡渡嘉敷島（トカシキ、慶良間列島中の最大の島）に上陸した。

同島で慶良間海峡に面する渡嘉志久（トカシク）に第二、三中隊及び阿波連（アワレン）地区に第一中隊の舟艇の秘匿を完了し、爾後この地区に宿営して攻撃訓練及び舟艇の整備を行なっていた。

なお同島には、十二月中旬に第二六戦隊も来島し、第三戦隊の秘匿地区と同じ地区に駐屯していたが、二十年一月初めから上旬の間に、任務地である沖縄本島の糸満地区に移動した。

二十年二月、基地大隊の主力は、第一、第二大隊と同様に、沖縄本島に転出したので、その勤務中隊一六二名及び整備中隊五五名が、新来の軍属隊である水上勤務一〇四中隊中の一ヶ小隊（二二三名）を併せて、戦隊長の指揮下に入った。

二〇年三月二十三日正午の昼食時に突如米艦載戦闘機の急襲攻撃をうけ、瞬く間に仮設の隊舎は炎上し、村落も日没までに殆んど全滅し、全島至るところ山火事が発生し、敵の進攻も間近に迫ったと実感された。

米軍は翌二十四日も、前日に比し攻撃は激化し、常時五〇～六〇機が在空し、焼夷弾を交えて銃爆撃をつづけた。

戦隊は、軍司令部に情勢の判断を求めたが、軍からは甲号戦備に準じて行動するよう下令された。

二十五日米軍は、早朝から空中攻撃に加えて猛烈な艦砲射撃を開始した。戦隊長は部隊を退避壕に入れ損害の軽減につとめ又不時の敵上陸に備えて、要点に勤務隊をもって警戒哨を配置し、軍司令部に状況を報告し処置を求めた。

軍からは、敵情判断不明、状況有利ならざるときは糸満附近に転進せよと命じてきた。戦隊長は、本島転進を決意し、二二時頃泛水を下令したが、勤務隊は殆んどが戦闘配備についており、又特設水上勤務隊は雲散して掌握が困難となり、その上泛水用の橇や木製レールも殆んど破壊され、泛水は甚だ遅滞した。又阿波連に配置した中隊は、湾口を閉塞する敵のため泛水作業は困難であった。

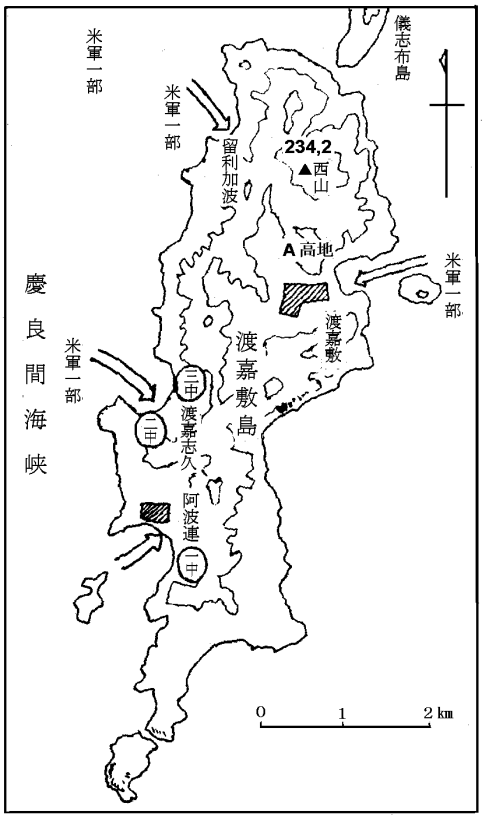
このとき、戦隊の戦備状況視察中の軍船舶団長大町茂大佐が、対岸の阿嘉島からクリ舟によって到着、軍の命令を知らず泛水の中止を命じたがすぐに再泛水を命じた。

船舶団長は、此の状況で一刻も早く軍司令部に戻り、全船舶部隊の指揮をとる必要を考え、敵海面突破帰還を提案した。戦隊長は、一緒に協議していた皆本中隊長に、特攻艇三〇隻をもって団長を護送することを持ち出した。皆本中隊長は此の期に及んで、転進はない、当面の敵に突入するのみだと回答したために団長は決心を再考し、戦隊全部の転進を決意した。

しかし、時既に午前四時を過ぎ、敵の航空攻撃がはじまり、ここで同種部隊の作戦行動秘匿のため自沈するに到った。

こうして戦隊はその機能を失ったが、当日は殆んど終日艦砲射撃と米軍機の激しい空襲を受けた。

既に隣島阿嘉島、座間味島には米軍が上陸し、渡嘉敷にも上陸は必至の情況となったが、大町大佐、三池少佐及び鈴木少佐（基地第三大隊長）は隊の責任者たる地位から、是非共沖縄本島に帰らねばならなかったので、第三中隊長が密かに自沈させず残した二隻の㋺舟艇を泛水し、海上戦死を覚悟の上で六名のみが本島に帰航することとして、一番艇は中島一郎少尉（幹候一〇期）が、二番艇は特幹の竹島誠伍長が操艇し、中島艇には大町大佐、鈴木常良少佐、山口中尉を、竹島艇には三池少佐、新海中尉、木村少尉を、他に各艇一名宛整備兵を乗せ、沖縄本島に護送のため二十六日午後十一時三十分頃、秘匿壕のあった渡嘉志久から慶良間海峡側を順次発進した。各艇は接近縦列を組んで航行、渡嘉敷西岸を北上し儀志布（ギシップ）島との海峡を抜けて、前島（マエシマ）南方から那覇に向かう航路をとった。しかし、二番艇は二十七日午前一時頃渡嘉敷島東方の沖合で浸水によって沈没したが島から近かったため、全員が遊泳して渡嘉敷島に帰りついた。このとき一番艇が前島の南方を東進しているのが二番艇から見受けられたがその後消息不明となり、大町大佐以下全員戦死したものと判断された。



その二十七日朝、米軍は掃討を終った慶留間島から慶良間海峡を横断して渡嘉敷島の留利加波（ルリカワ、第二中隊が陸上配備とされていた）、渡嘉志久（第三中隊が所在）、阿波連（第一中隊が所在した）の三方面に、各々戦車二～三〇台とともに、それぞれ一コ大隊（約三〇〇名）程度の兵力で上陸を開始してきた。

戦隊及び基地隊は、水際地で小規模の戦闘を交えたが、到底敵対できず、漸次戦況不利となったため、（特に渡嘉志久では勤務中隊の高塚小隊が、小隊長以下九名が戦死した）各隊は同日夜に入ってから、戦隊長の命令に基づいて、同島の西山（二三四・二高地）地区に予ねてから予定してあった複廓陣地に撤退して、徹底抗戦の準備態勢をとって布陣した。

しかし第一中隊は伝令が伝わらなかったため、二十八日になっても西山地区に到着しなかったので、本部では将校伝令を出したが、第一中隊は二十七日夜に北部に向って進行し、途中で米軍と交戦し、佐藤少尉以下数名の戦死者を出した。このため一時舟艇壕裏の高地に撤退し、三十日に至ってようやく本隊に到着した。

こうして二十八日から三十一日までの間、米軍は複廓陣地を包囲する態勢を作り、昼間には数度にわたって攻撃をしてきたが、戦隊を中心とし各隊はこれと交戦し、かつ夜間は積極的に少人数による斬込みを行ない、二〇名の戦死と数名の負傷者を出した。

米軍は四月一日に始まった本島上陸作

戦に参加するため、各陣地に撤収を行ない、三十一日には全員が撤退を完了した。

以後四月一日から五月五日までの間は、米軍は島に上陸せず、また在留しなかったため、各隊はこの機を利用し、それぞれ昼間は陣地構築に夜間は現地自活に専念できたが、食糧は漸次欠乏するようになった。

こうした中で、五月五日に第二戦隊第一中隊の稲垣栄少尉（幹候一〇期）と第一戦隊の特幹大川護伍長が、軍司令部の命令で無線器を携行し、くり船で渡嘉敷に着いた。更に稲垣少尉は阿嘉島に渡ろうとしたが、阿嘉島部隊の全滅の情報を聞き渡航を断念し、爾後島にあって無線器によって本島の司令部にあて、慶良間周辺の米軍の艦船情況を継続的に報告を行ない、この地区への日本軍の飛行機、特攻機の来襲に貢献した。

この稲垣少尉の到着直後、先に本島渡航に失敗した三池少佐は、このくり舟を利用して五月十二日には遂に那覇到着に成功し、その後の行動については第五海上挺進基地隊本部の項に於て詳述したとおりである。

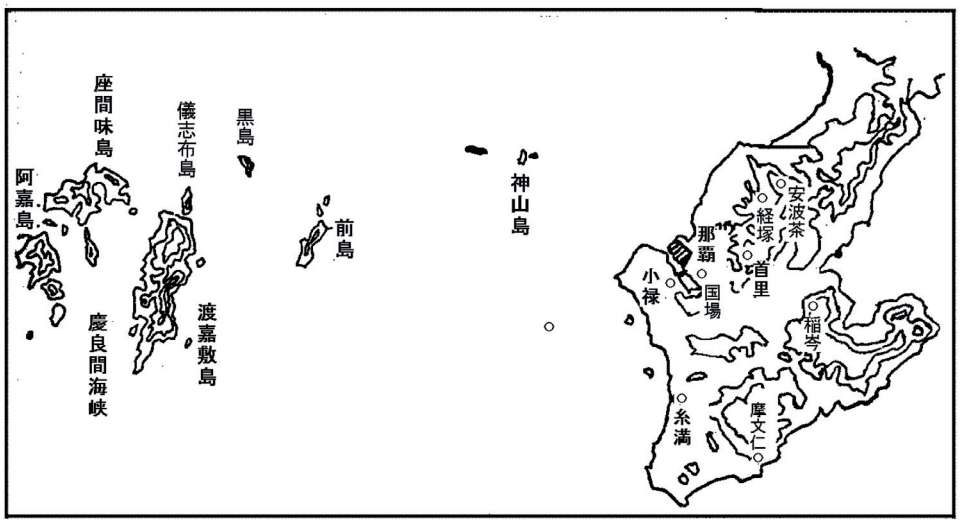
ところで五月九日に至って、米軍約五〇〇名が再び上陸を行ない、物資を揚陸するとともに、翌十日から戦隊陣地を攻撃してきたので、応戦態勢に切替え、隊は適切な処置をもって撃退した。

しかしこれから以後は、大体一ないし二コ大隊（三〇〇から七〇〇名程度）の米軍が、常時渡嘉敷部落を中心に陣地を占拠し、戦隊はこれと待峙して時折小規模ながら、五月十三日から十五日の三日間に攻防戦を行なってA高地（渡嘉敷部落北方の第二中隊の前進陣地）を保持し、また時々夜間の斬込みを行なって米兵を脅かした。（特に五月十一、十二日の夜間斬込みは記録されている）

在島した米軍の兵力は、重機陣地、迫撃砲陣地などを主とし、更に渡嘉敷地区には鉄条網、地雷などの障害物を設けていたが、この米軍は陣地を確保し、また伊江島を始め周辺の諸島の住民を収容しておくことが主任務であったと思われ、三月時の上陸米兵に比較すると、その攻撃は消極的であった。

その後も六月十三日夜に斬込戦を行ない、また二十三日には再び前記のA高地が攻撃を受け、四名の戦死者を出したが、これも撃退に成功した。

こうした情勢の中で、七月以降戦隊を始め各隊は、漸次深刻な食糧問題に直面し、その確保に苦しんだが、八月十五日に無電により日本の全面降伏を知り、十八日から米軍との停戦交渉を始め、二十三日正式に降伏調印を行ない、二十四日全員武装解除を受けて、翌日本島の屋嘉収容所に収容された。



同戦隊の損害は、将校六名、隊員十五名の合計二十一名の戦死があり、内地還送者三名があった。

海上挺進基地第三大隊は、暁（後に球となる）第一六七九〇部隊と称し、十九年八月二十八日宇品で大隊長鈴木常良大尉（少尉候補者一六期で、同年の十二月に少佐となる）の下に編成を行ない、大隊の主力は九月十日に宇品を出港し、十五日鹿児島に廻航待機していたが、沖縄空襲のあと十月二十一日鹿児島港を出航し、二十六日に島尻郡渡嘉敷島に上陸し、島内各地区に宿営施設と舟艇壕の基地設定を行なった。

二十年の二月十八日に第一、第二大隊と同じく大隊主力は勤務中隊の一ヶ中隊（中隊長西村市五郎大尉以下一六二名）と、整備中隊（中隊長木林明中尉以下五十五名）を残置し、約七〇〇名は沖縄本島の南部に配置されることになった。

西村大尉を長とする渡嘉敷残留の勤務中隊と整備中隊は、基地大隊の転出のあと補充要員として、水上勤務中隊の一ヶ小隊（小隊長斎田重雄少尉指揮の朝鮮軍夫の隊で、下士官兵一三名を含む二三〇名）は、戦隊長の指揮下に入り、前記のように三月二十七日から戦隊とともに上陸米軍と戦闘を行なった。

渡嘉敷島における戦死者は軍夫を除き、将校二名を含め三十八名であった。

本島に渡った大隊の主力は、独立第三大隊として、異動の当初は球兵団中の独立混成四四旅団の旅団予備隊として配属されていたが、大隊長鈴木少佐は前記のように大町大佐とともに、慶良間巡視中三月二十七日海没戦死したため、勤務中隊の更田大尉が大隊長代理として指揮をとっていた。

四月中は島尻地区の稲岭付近の警備を担当していたが、同月二十七日旅団長命令により第六二師団（石部隊）中の歩兵第六四旅団に配置替えとなって、国場（コクバ）付近に移動し、五月二日にその中の独立歩兵二三大隊と行動をともにした。

五月三日から五日に至って、首里付近の安波茶（アワサ）付近で、米軍の有力な第一線部隊と戦闘になり、五日を中心に爾後同地区の陣地で防備の戦闘を繰返したが、十二日頃までには戦死者が続出し、主力である本部は更田大隊長代理以下二〇名程度となり、二三大隊長の命令で南部に後退した。

以後なお首里及び経塚等で転戦していたが、主要兵力は失われ、五月末の南部転進以後、殆んど大隊としての組織的戦闘力はなくなっていた。

同大隊の被害は、総員八八六名中、米軍上陸前の戦死者二十四名、戦闘による戦死は渡嘉敷での三十八名を含め五九九名、他への転属二十九名があり、生還者は二一六名であった。

運命の自沈命令

「第十一船舶団長・大町大佐と海上挺進第三戦隊」

元海上挺進第三戦隊　木村　幸雄

渡嘉敷島の我が海上挺進第三戦隊は、戦隊長・赤松嘉次大尉（陸士五十三期）の下、渡嘉志久基地には、戦隊本部・第二・第三中隊、兵員七十三名・㋺艇七十隻、阿波連基地には第一中隊、兵員三十一名・肉薄攻撃艇三十隻が展開し、又、戦隊を支援するための海上挺進基地第三大隊、約九百名が連日戦隊と共に訓練に励んでいた。

昭和十九年に入ると戦況は益々不利となり、レイテ作戦も敗北に終わると、大本営は次ぎの攻撃目標は沖縄より台湾が先であろうと判断し、二十年一月、第三十二軍の中でも最強と認められている第九師団を台湾に転出、軍はこの転出による兵力の減少を補充するため、本島及び離島に布陣する各海上挺進戦隊支援の海

上挺進基地隊からそれぞれ総員の三分の二程度の兵員を独立大隊の形で編成することになり、二十年二月、渡嘉敷島からも第三大隊主力七百名が独立混成第四十四旅団に転属した。

その為、基地隊は中隊長以下百六十一名、整備中隊は中隊長以下五十五名、そして作業援助要員として本島より特設勤務一コ小隊、小隊長以下兵十三名、軍夫二百十名となり、赤松戦隊長の指揮下に入った。

基地隊の装備は、重機関銃二挺（弾丸千弐百発）軽機関銃六挺・擲弾筒七挺・小銃百五十二挺・三号無戦機一台・五号無戦機四台・電話機八台。

整備中隊の装備は、小銃四十五挺・軽修理車一台、軽機関銃や小銃用の弾丸も豊富ではなく、本格的に戦闘できる体制ではない。

三月二十二日、慶良間列島に布陣する第一・二・三戦隊の特攻作戦を指導する為、第三十二軍・第十一船舶団長大町茂大佐（陸士二十九期）副官山口中尉・石田小尉・渋谷見習士官以下六名の通信班に当番兵一名の計十一名と、第五海上挺進基地隊本部からは、三池小佐以下三名が同行し、まづ第一戦隊基地座間味島を訪れた。

翌二十三日、特攻艇秘匿壕視察。

当日午前十一時三十分、将に晴天の霹靂か、慶良間の各島々に突如グラマンＦ６の空襲が始まった。凄槍を極めた沖縄戦の先端はここに切って落とされたのである。

「三月二十四日・二十五日の両日、大町大佐は海上挺進第二戦隊を視察指導した。

又、二十四日以降空襲は更に激化し、二十五日には慶良間諸島は猛烈な艦砲射撃を受けることになった。

大町大佐はこの艦載機による空襲を上陸作戦に伴う前哨戦とは考えず、十九年十月十日、二十年一月二十一日・二十二日の撹乱空襲と同様と判断し、予定通り視察を続行し二十六日渡嘉敷島に渡る予定であったが、刻々と変わる状況の変化から之を断念し二十五日二十二時、阿嘉島から那覇に向かって出発した。

渡嘉敷島の第三戦隊は二十三日、述べ三百機の空襲を受け、阿波連の第一中隊の被害が最もひどく戦死十一名負傷十名、特攻艇三隻破損、その他機材や倉庫に収納してあった弾丸・食糧など多数の損害を受けた。

赤松戦隊長は敵来襲の近い事を予想し、二十四日には早くも臨戦態勢に入り出撃の準備を着々と進めていた。

二十五日には戦艦・空母を軸とした機動艦隊が姿を現した。昨日に勝る猛烈な攻撃が終日続いたが我が方には反撃する火器が無く、壕にこもって日の暮れるのを待つばかりであった、然し戦機は到来した。

出撃は時間の問題だ、私はとうとう覚悟する時がきたと思った。

私の所属する第一中隊第二群は秘匿壕がなく特攻艇は草むらの中に天幕をかぶせ露天におかれていた、従って二十三日の空襲で三隻が破損し使用可能の特攻艇は六隻に減って居た。私の艇は幸い無事であった、出撃は二十六日深夜と予想した、敵艦攻撃の場合、三艇一組となり艦の横腹に突進し爆雷を落とし急速転舵して回避するよう教育された。

敵艦は目の前、手の届く所にいっぱい停泊している、将に好機到来、間もなく中隊長の命令が下るものと誰もが緊張していた。

私は敵来襲の場合、特に離島の挺進隊戦隊長は状況を分析・判断し戦機を逸しない為にも独自の見解で出撃命令をだせる権力を持っているものと思っていた、ところが軍の指揮系統はそんな単純なものではなかった。

特攻艇の運用に就いては三月十日から

十二日にかけて、船舶団長大町大佐統裁のもと、那覇において牛島軍司令官をはじめ陸・海の首脳や海上特攻関係者が一堂に会し、海上挺進攻撃の兵棋演習が実施された。

この演習の結果、特攻艇の出撃海面が割り出された事により最大の戦果を挙げる為の作戦が検討された。

軍司令部ではこの作戦を重視し、改めて各戦隊長の独断出撃を厳重に禁止し、状況によっては全戦隊を那覇に集める様に指示した。

赤松戦隊長は此の命令を守り慶良間列島周辺に集まった艦艇の状況を軍司令部に打電、出撃命令の出た時迅速な行動が取れる様、二十時、独断で各中隊に三分の一の泛水を命じた。

渡嘉志久基地の本部・第二・三中隊は闇夜の為、敵艦の妨害も無く軍、民一体となり作業は順調に進んだが、阿波連基地の第一中隊は湾口に駆逐艦が侵入した為、泛水は不可能な状態となっていた。

二十一時三十分、船舶団本部より、

「敵情判断不明、慶良間の各戦隊は状況有利ならざる時は所在の艦船を撃破しつつ那覇に転進すべし」との命令が届いた。赤松戦隊長は本部に各中隊長・群長を集め、船舶団本部の命令を検討し協議の結果、本島転進に決定、二十二時、全特攻艇の泛水が命令され、戦隊が一丸となって作業に没頭している丁度その時、阿嘉島より那覇に向かったはずの大町大佐一行が渡嘉敷島に到着した。

大町大佐に同行した石田四郎少尉（幹候九期）の手記「大町茂大佐の海上戦死」によれば

「船舶団長の重責を負う大町大佐は二十五日二十二時頃、特攻艇二隻に搭乗して一路沖縄本島を目指して出発した。艇隊は第二中隊・宮下力少尉（幹候十期）の指揮下、小田・麻生・村上の三候補性で何れも当千の勇士である。

一号艇には大町大佐・副官山口中尉・石田少尉、二号艇には三池少佐・木村少尉・南技術少尉が乗った。暗黒の慶良間海峡を行き、全面に渡嘉敷島が迫る頃、右舷方向より砲撃が始まった。二連装の砲塔を発した灼熱の平行線は、艇の頭上を轟音と共に掠め、或いは海面を跳ねて渡嘉敷島で炸裂した。前方にも敵艦が行く手を塞ぎ、やむを得ず艇を渡嘉敷島の阿波連に接岸した」

とあり、大町大佐が渡嘉敷島に来られたのは視察の為の予定通りの行動と思っていたが、この手記により大町大佐は敵状を見て本島への直行を中断、危険を避ける為、一時的に渡嘉敷島に立ち寄られたものと推察される。

二十五日から二十六日にかけての第三戦隊の永き二日間を整理してみると、

二十五日二十時　戦隊長、独断にて三分の一の特攻艇泛水。

二十一時三十分　軍司令部より命令受領。

二十二時　戦隊長転進を決意、戦隊本部・第二・三中隊の全特攻艇泛水開始。第一中隊、湾内に駆逐艦侵入し作業を妨害、命中弾により数隻の特攻艇炎上し爾後の泛水不可能となる。

二十四時　大町大佐以下五名、本部に到着。

大町大佐は此の泛水作業を、指揮系統無視の独断先行と誤解して戦隊長を叱責したが、説明により了解したものの、泛水の時期尚早とみて泛水を中止させた。しかし、大町大佐は船舶団長としての重責上、一刻も早く本島への帰還を希望し一群（九隻）をもって送還する事を命令した。

戦隊長は各中隊長と作戦を検討した結果一群では危険と判断し、その任を第三中隊長・皆本義博少尉（陸士五十七期）

指揮の下、第三中隊艇三十隻をもって決行する事を命令した。

皆本少尉の脳裏に浮かんだのは第三中隊出発後、敵艦に突入する戦隊の姿であった。少尉は、戦略上大町大佐の送還も大事であるが、自分の本分は敵艦攻撃であり、かねてよりの覚悟の通り戦隊と運命を共にしたいと此の命令を断った。抗命の罪をも辞さぬ勇気ある発言に戦隊長は感動し、生死を共にすべく今日迄起居を共にしてきた者にとっては当然の意見と了解し、戦隊全力での護送を具申した。

大町大佐は戦隊の強固な決意に心を動かされこれを容認、戦隊は大佐の送還を達成する為、全艇総力を結集しての本島転進が決定した。

戦隊命令・於渡嘉志久本部

一、敵情・略。

二、戦隊は主力をもって途中の敵を撃破しつつ船舶団長と共に沖縄本島に転進せんとす。

三、渡嘉志久基地の各中隊は直に全舟艇の泛水出撃を準備すべし、出撃の時期は別に示す。

四、整備中隊は舟艇に一名宛整備兵を付し戦隊と共に行動すべし。

五、第一中隊は機を見て出撃、沖縄本島に転進、本隊に合流すべし。

六、戦隊出撃後、勤務隊西村大尉は勤務隊・水上勤務隊を指揮し敵を迎撃すべし。

命令一下、戦隊は敵砲撃をものともせず勇躍出撃の作業を開始したが、基地兵力の減少と、作業中断による時間のロスは如何ともし難たく、出撃準備完了は二十六日〇五時、東天は白々と明け始めてきた。

石田少尉の手記

「戦隊長は天明後の転進は不可能と考え、直ちに出撃して、前面の敵艦隊に突入する事を具申した。大町大佐は、沖縄本島に対する米軍主力上陸前に特攻艇を使用する事は企圖秘匿上適当ならずとして許さず、大佐は艇の揚陸を命じたが、兵の体力、気力既に限界となりとうとう夜が明けた。逐に大佐は出撃を断念、揚陸可能の二隻の外は自沈する事を命じた。戦隊はようやく第三中隊の二艇を揚陸したが、他の艇は涙をふるって自沈した」とあり、

渡嘉志久基地の本部・第二・第三中隊は舟艇自沈後、取り外した爆雷に信管を装着し地雷として海岸に埋没し、敵上陸に備えて全員水際陣地に着いた。

渡嘉敷島は終日艦砲射撃を受けたが幸にもこの日米軍の上陸はなかった。夕刻、大町大佐・戦隊長以下将校全員、第二中隊旭沢陣地に集合、再度大町大佐送還の作戦会議の結果、第三中隊第二戦闘群群長・中島少尉（幹候十期）以下四名が護送の大任に着く事になった。

石田少尉の手記

「二十六日二十二時頃、航行可能な艇二隻に総てを託して大町大佐は沖縄本島を目指して出航した。一番艇には艇長・操縦手としての中島少尉と整備の土肥技術伍長、そして大町大佐・鈴木少佐・山口中尉の計五名が乗艇し、二番艇には艇長・操縦手として竹島伍長（特幹一期）と整備の田中技術上等兵、そして三池少佐・新海中尉・木村少尉の計五名が乗艇した。

注（二十二日、基地第三大隊長鈴木少佐・新海中尉・竹内軍曹・他一名が基地視察の為来島していたが、本島に帰る為、鈴木少佐・新海中尉が同乗した）

大町大佐は出発に際し、転進途中、万一遭難することがあっても両艇は互いに救助する事なく一路那覇に直行すべき旨を訓示した。渡嘉志久の渚で石田少尉・南技術少尉等数人が二隻の特攻艇を見送り大佐一行の武運を祈った。

両艇は渡嘉敷島西岸を北上し儀志布北方を迂回、前島南方から那覇に向かう行路をとった。二番艇は儀志布南方において舟艇に亀裂を生じ、浸水のため遂に二十七日午前一時頃沈没したが、三池少佐以下全員渡嘉敷島に泳ぎつき戦隊本部に辿りついた。

一番艇が前島の南方を東進しているのが二番艇から見受けられたがその後消息不明となり、大町大佐以下四名は全員戦死したものと判断された」と簡潔明瞭に記されている。

若しも大町大佐が渡嘉敷島に立ち寄らずそのまま本島に直行しておられたならば第三戦隊はどうなっていた事だろう。

第三戦隊の作戦は二十五日二十一時三十分発令の「敵情判断不明、慶良間の各戦隊は状況有利ならざる時は所在の艦船を撃破しつつ那覇に転進すべし」との本部の命令に従い本島に転進すべく鋭意泛水作業を強行し、二十六日午前二時頃には出撃態勢を完了していた。出撃可能な第二、第三中隊は可動舟艇六十隻、これに爆雷を装備し、搭乗員（戦隊本部・第二・第三中隊七十三名・整備中隊三十七名）計百十名が特攻艇に分乗して那覇に向かって出撃した事となる。特攻艇は平均時速二十キロと称しているが鏡の様な水面ならいざ知らず、海の様相は不定である。ベニヤ板製の特攻艇は一寸した波にでもスピードは落ち重い爆雷を積めば操縦もままならない、艇隊は進むにつれエンジン故障で漂流する艇や船体破損で沈没する艇が何隻かは出たことであろう、又六十隻の集団は決して少なくない警戒中の魚雷艇や掃海艇に発見される可能性は大であり、その結果は想像するに忍びない。夜の為、全滅は免れ何隻かは那覇に到達し本島での特攻作戦に活躍したことと思うが、本島の特攻隊が殆ど全滅した事実から第三戦隊も同じ運命を辿った事と思われる。

又、返す返すも残念に思った事は二十六日の出来ごとである。二十六日未明、第三戦隊は大町大佐に特攻艇の揚陸を命じられたが、戦隊員の疲労は極限に達し、勤務隊・水勤隊は既に陣地に立て籠り、その為、戦隊長は現在掌握し得る人員をもってする揚陸は不可能と判断し、目前に停泊する艦船に対し攻撃命令を懇願したが、大町大佐は他戦隊の作戦に及ぼす影響を考えて出撃はゆるさなかった。

が、攻撃が許されていたらどうなっていた事だろう。

各艇は続々準備を完了し今や遅しと出撃命令を待っていた。目標は目の前だ、大町大佐一行・基地隊の見守る中、全艇は白波を立てて突撃する。当然敵は反撃する、穏やかな海上は修羅の闇と化し壮絶な戦いが展開された事であろう。転進に比べれば距離は短く、たとえ白昼でも十数隻の敵艦を撃沈出来たであろうし、又生還する隊員も何名かはいたであろうが、覚悟の上とは言え全滅に近い損害を蒙ったに違いない。

しかし、水上特攻隊としての任務を果した第三戦隊の栄誉は燦然と戦史に輝いた事と思う。

大町大佐は渋谷見習士官を長とする無線班七名を帯同していたが、予想に反して迅速であった敵の猛烈な空襲・砲撃を受け、軍司令部や他の戦隊と充分な連絡が取れず、第三戦隊の場合も現場に直面して始めてその状況を知る始末、その為に適切な指示が出されず遂に戦機を逸し、精鋭な特攻部隊の殆どが持てる特技を発揮する事なく無念の終末を迎えたのであった。

以　上

無念！特攻機上通信士
坂伍長の殉職

大槻　健二

はじめに

昨年十一月の世田谷山観音の月例法要にて、特幹一期生の呉正男（ごまさお）氏とお会いする機会を得た。経緯は省くが、教育は水戸陸軍航空通信学校　長岡教育隊で受けたという。私が「坂さんという方を知っていますか」とお聞きしたところ名前を覚えていて、同期ということを知った。

帰宅して、集合写真を眺めていたところ、なんと「坂さん」の前列、手を伸ばしたら届きそうな場所に「大山（呉）」という表記があった。思いがけない出会いに触発され、急いで原稿を書くことにした。

ここでの「坂さん」とは、陸軍特別攻撃隊・第四十五振武隊の機上通信士、坂恒夫伍長の事である。

彼は「特攻戦没者」ではない。出撃を目前にしながら、訓練事故で殉職した人物なのである。

坂が所属した陸軍特別攻撃隊・第四十五振武隊、この隊の特殊性の最たるものは、操縦者ではない藤井一中尉の特攻志願から始まっている。熊谷飛行学校第二中隊長であった藤井中尉が特攻志願を行い、それに反対する妻が二児を道連れに入水したことによって志願が受理されるという、たいへん悲劇的な話がある点、操縦者の人員（後述）が航空士官学校五十七期と少年飛行兵十三期で纏まっており、士気が高く強固な団結を誇っていた点、そして、珍しく機上通信士が配置されていた点である。

隊の編成人員について記す。

第四十五振武隊

隊長	藤井　一中尉
小隊長	小川　彰少尉
同	鈴木邦彦少尉
同	中田　茂少尉
同	北村伊那夫伍長
同	小川春雄伍長
同	與國　茂伍長
同	一口義男伍長
同	宮之原太吉伍長
同	宮井政信伍長
機上通信	伊藤好久伍長
同	坂　恒夫伍長

※宮之原伍長は生還

※伊藤・坂の階級は兵長、坂は特幹の制度上伍長進級前提の「候補生」と呼ばれていた。

水戸航通校長岡教育隊第十中隊

坂、呉さん両名が特別幹部候補生として教育を受けたのは、水戸陸軍航空通信学校　長岡教育隊（茨城県東茨城郡茨城町・旧長岡村）であった。長岡教育隊の一期生は昭和十九年四月五日着隊した。

入校中の所属は第十中隊。各中隊にはその数字に因んで「伊勢隊」（一中隊）「陸奥隊」（六中隊）などの名称を付けていた。

十中隊は「十勝（とかち）隊」であった。『軍人軍属短期在職者が語り継ぐ労苦（兵士編）第十三巻』所収の平野康夫氏の寄稿によれば、

第十中隊は機上無線要員の教育中隊で、中隊出身者から十二人の戦死者（特攻を含む）を出した。元来、航空通信という兵科は飛行機に乗って電鍵を握り「トトツー」をやるとばかり思っていたが大違いだった。適性検査によって選抜されたエリートであり、全体の一割程度しか採用されない。大部分は地上にいて無線機を動かし空中と交信したり、暗号や情報をとったり、無線機の整備に服務した。

とのことである。他の記述でも航空通信

学校に行けば飛行機に乗れると思って入校した者が多数いたようだ。しかし空中勤務者は入校後に選抜され十二個中隊の中で一個中隊だけという、狭き門であった。

長岡教育隊出身の特幹一期生の文集『われら青春の記録』に掲載されている十中隊の深井正昭氏・中山幸栄氏の寄稿を総合すると、他の中隊に着隊し、四月十日の入校式の点呼時に班長から空中勤務希望者の調査があり、希望者の内指定された者は適性検査を翌日から受け、十四日午後に編成替えが行われたようである。このような事情があるため、坂の入校当初の所属は不明なのである。

同書の十中隊平野一徳氏の寄稿では、

教育隊では、唯一の空中勤務者を養成する中隊として訓練は例外中の例外と思われる程の厳しさでした。中隊長はもとより区隊長や班長も、何かとことある毎に「貴様等は空中勤務者となる候補生だ、甘ったれるな。」と気合のかけどおしで、少しの息も抜く暇もありませんでした。

とあり、先の十四日の編成替えによって十中隊だけを機上通信要員としたようである。

訓練内容はどうであったのだろうか。呉正男さんによると機上経験は双発高練での五、六回程度の搭乗経験という。機上訓練以外は地上教育であった。航法の教育や地上戦闘の訓練等も無く、通信技術に重点を置いた教育であったとの事である。

特攻要員へ

坂は教育隊卒業と同時に特攻隊員となった。『嗚呼!!わが特幹　青春の記録』（山形特幹会記念誌）冒頭に掲載された十中隊の吉田長三郎教官の手記には特攻要員選出の記述がある。

昭和二十年一月卒業を目の前にしたある日、当時の内藤教育隊長より特攻要員として候補生より一名選抜するよう命令がありました。早くも噂が広まったのでしょう、血書嘆願の志望者が相次ぎましたが、深沢中隊長と相談して二名の候補生を選び、教育隊長のところへ内申しその選考基準を申し上げたところ、内藤隊長は我が長岡教育隊として第一号の特攻要員であるから、家庭環境よりも最優秀候補生を選抜するようにとの指示を頂き、当時航空総監賞第一位を受けた坂恒夫候補生（北海道出身）に決定しました。

（中略）坂候補生の壮行会が大広場で全校生の前で行われ、壇上で内藤教育隊長が声涙溢るる壮行の辞で、坂候補生は軍神となるのであるとの言葉が今も生き生きとして耳朶に残っております。彼を鉾田の特攻基地に送って最後の握手をし去り行く後姿に涙したものでした。

『われら青春の記録』巻末には、元長岡教育隊長・内藤二三男中佐を戦友会員が訪問した際の文が掲載されている。

教育隊より特攻隊要員として転属した、坂、本間両候補生の特攻隊員転属に当たって、坂、本間両候補生については、常に心痛されておられたご様子。「本間候補生が無事でいることが分かったのは、私の唯一の慰めでした。」と話されました。

両候補生の特攻隊員転属に当たって、内藤さんのお宅で壮行会を催され、その時の様子を奥様が「これが特攻に行かれる方かと思われる程落ち着いていて、楽しく過ごして呉れた坂候補生、本間候補生、また、二人を心から心配されていた深沢さんのご様子が、いまだに目に浮かびます」と話されました。

教育者として少年たちを見て来た上層部が、要員を指名する際における心理的重圧は非常に強いものではなかっただろうか。なおここでの本間候補生については先の吉田教官の記憶と食い違うが、経

歴未詳のため言及はしない。

坂は卒業後すぐに鉾田へ転出したが、鉾田教導飛行師団司令部に配置されてから特攻編成までの動向は不明である。

特攻「第四十五振武隊」の一員として

昭和二十年二月八日、大詔奉戴日。この日、正式に特攻隊の編制下に入る旨の命課が鉾田教導飛行師団において行われた。これに先立ち、特攻隊の人員割当表が航空総監より発簡されている。（防衛研究所所蔵）

航総機密第二十号増加配属（装備）人員（資材）差出ニ関スル件達

昭和二十年二月五日　陸軍航空総監

（中略）

一　増加配属（装備）人員（資材）差出区分別紙ノ如シ

この「別紙」を見ると、と号四十五飛行隊（四十五振武隊の前身）の人員割当は

中　（少）尉（操縦）一

尉　官（操縦）二

准士官、下士官（操縦）六

二　式　複　戦　九（三）

※（三）は予備機

右の通り操縦者九名・九機の編成である。これは同じ二式複戦の「と」号二十四飛行隊（第二十四振武隊）と同様の記載であり、実際の出撃も割当表通りである。と号四十七飛行隊（百式重爆）には九名の機上通信士が明記されている。この事から、四十五隊の表記で書類上省かれた訳ではない事が分かる。これは筆者の憶測に過ぎないが、冒頭で述べた様に、操縦者ではない藤井中尉の特攻志願による特殊事情から、隊長はじめ小隊長機に通信士が配置されたのではないだろうか。

『第四十五振武隊戦闘概要』には、「藤井中尉ハ航法将校トシテ・・・」という文が見られる。操縦者ではない者が特攻隊員として後部座席に同乗するにあたっては人事上の配慮が働き、機上通信士二名の増員が決定されたのでは…これはあくまでも筆者の仮説に過ぎないが、これには何らかの理由があったはずである。

かくして「と号第四十五飛行隊」は二月九日に人員の編成が完結した。「振武」の名称を冠するのは少し後、三月の事である。編成当初鉾田にあり、飛行演習に加えて機体の改修等で八日市、艦船攻撃演習で大分等に出張したりしていた。（通信士二名のみ残留する場合もあった）

松戸飛行場

以下何度か引用することになる文章は、『小さな足跡』と題した鈴木邦彦少尉の日記で、昭和十九年十一月二十八日より翌二十年五月八日迄の自筆による克明な記録である。以下、『鈴木日記』と記すが、原町飛行場で実用機の練成にあたっていた航士五十七期に親しまれ、鈴木少尉を「お兄さん」と呼んで慕った高橋圭子会員（料亭柳屋主人・松浦誠寿長女）が長年保存してきた遺品である。

『鈴木日記』

三月二十九日

梟部隊ナレバ夜行ノ為昼間ハ眠ルガ如キ静ケサ（中略）此所ノ日課ニ従ヒ一一〇〇起床朝食ハ前夜ノ二三〇〇ニ済マス専ラ夜間能力ヲ鍛フ（後略）

隊の編成後、黒磯飛行場を経て三月二十八日、松戸飛行場に移動。ここの主要部隊である飛行第五十三戦隊は夜間戦闘専門の本土空襲迎撃部隊であった。この飛行場にあって隊員達は飛行演習、攻撃要領等の錬成を重ねてゆくこととなる。

伍長へ進級

昭和二十年四月十一日、機上通信士二名はこの松戸飛行場において陸軍伍長へ進級した。

『鈴木日記』

四月十一日　水曜日　晴

（中略）伊藤兵長及坂候補生四月二日附

ヲ以テ陸軍伍長ニ任ゼラル　明日夜ハ彼ガ為祝宴ヲ開キ今後ノ奮闘ヲ促サントス

（高橋会員宛の葉書より）

二〇、四、一三消印

松戸市五香六実東部第百七十六部隊気附

藤井（特）隊　　鈴木邦彦

今日の夕方発令があって伊藤と坂が一躍に伍長に任ぜられました　喜んでやって欲しい　今日は幸ひ演習が出来ないので早速宴を開き彼等を祝ふ筈です　新聞には愈振武隊の名が出始めましたね　漸く武運が開けて来た様な気がします　先は右御報せまで　元気で　さよなら　十一日

『鈴木日記』

四月十四日　土曜日　晴

伊藤　坂ノ進級任官ヲ祝シテ飲ム　芸者宴ノ常、乱痴気ニ到ル　然レドモ飽クマデ団結ニ基カバ亦可ナリ

夜間飛行訓練

特攻隊に限らず、攻撃にあたっては損耗率の低い方法を採るため、夜間飛行の技術が求められた。飛行学校でも、訓練の仕上げとして風防に暗幕をかけて計器飛行を行うと聞く。夜間飛行は視界の一切が遮断され、計器と勘を頼りにしなければならず、常に危険と隣り合わせであったようだ。夜間演習では整備工員（軍属）の死亡事故も発生している。

『鈴木日記』

四月二十日　金曜日　晴

月影漸ク光ヲ増シ愈夜間飛行時機ナリ

（後略）

四月二十日　土曜日　快晴

（前略）夜間飛行中富田工員小川少尉機ニ連絡セントシ翼上ニ上リタル所　相互ノ連絡連繋不充分ニシテ飛行機ハ離陸滑走ヲナシ為ニ富田ハ転落重傷セリ（後略）

四月二十二日　日曜日　快晴

本日ヨリ昼間ノ演習ヲ廃シ夜間ニ徹ス

（中略）

昨夜重傷入院ノ富田工員看護ノ甲斐空シク死亡セリ　我等ノ整備協力ニ尊キ殉職ヲ遂ゲタルアリ　我等隊員断ジテ彼ガ死ヲ犬死タラシメザル様最後迄奮斗セザルベカラズ

四月二十三日　月曜日　晴

（前略）本日モ夜間飛行　予之ガ演習ヲ指揮ス　月明ナレバ煙霧ハアルモ概ネ容易ナリ　下士官以下全員夜間離着陸ニ移ルヲ得タリ（後略）

坂伍長殉職

訓練最盛期とも言えるこの時期に至り、またもや夜間飛行に起因する事故が起こった。坂の殉職である。

『鈴木日記』

四月二十七日　金曜日　晴後雷雨

（前略）例ニ依リ夜間飛行実施ス（中略）編隊ニ移ル予モ又小川伍長ヲ僚機トナシ離陸スルモ天候意外ニ悪ク雨滴ノ風防ヲ打ツヲ認メ二十分の在空ニテ着陸シ二回目モ断念ス（※前日も断念していたが中止決定後に晴れたため、この日もあえて挑戦したようである）

其ノ頃　中田少尉機着陸地帯ニテ転覆大破の事故ヲ惹起ス　直チニ馳着クレバ中田少尉ハ健在軽傷ナリシモ同乗ノ坂伍長ハ敢（あえ）ナク殉職ノ惨事ヲ目ノアタリ見ル　生死ヲ共ニト誓ヒシ我等隊員モ其ノ一名ヲ決行前ノ珍事ニ失フ痛惜ナド生易シキ言葉ニテハ表現シ得ザル悲惨ナリ　血肉分ケ会ヒシ仲ニハアラネド寧ロ夫レ以上ノ悲哀　特攻隊ノ晴ノ死所ヲ持チ乍ラ決行前ニ静心ナク散リ逝キシ若桜何程カ無念ノ事ナラン　嗚呼今トナリ

テハ如何ニ心ヲ使フトテ既ニナキ彼再ビ
帰ルマジ是ニ至リ筆遂ニ進マズ

余りにも惜しき命のとく散りて
　　かへらぬ今を慨くかなしき

たくましき若鷹の翼友に魁け
　彼方の空へ飛びてかへらず

まて暫し仇波寄する島影に
　大きいさをし打建つるまで
　　君以テ冥ス勿レ暫時！

次の世は生れかはりてわたつみの
　底のそこまで共にゆかなむ

次の世もまたつぎの世も生れ出でゝ
　守り徹せよ大八州国

ここに、高橋圭子会員が鈴木少尉の足跡を追う慰霊の旅の中で宮之原太吉氏（鈴木少尉と同じ小隊で、撃墜され生還した方）に取材した際に録音したテープがある。ここには、事故当時の生々しい証言があった。

【…中田少尉がね、着陸を誤ったんですよ。あの時は夜間攻撃がありうるちゅうことでね、夜間の離着陸をね、松戸で訓練したんですよ…中田少尉が着陸を誤ってね、あの、もう接地したと思うて飛行機の返し操作をしたのがね、地上三十メートルぐらいから落ちたはずですよ…三十メートルぐらいの所で接地するということでレバーを絞って操縦棹返してね、飛行機の速度を完全にストップちゅうかね、そんな状態になったもんだから…失速して下に落ちて　飛行機がひっくり返しになりましてね、僕ら訓練しとったんだから　そこに居ったんだからね、すぐ吹っ飛んでいったんだけども飛行機がひっくり返しなってね、中でもの言うとるわけなんですわ。それで何とか引っ張り出してやらにゃいかんということで、それで今のような起重機とかそんな気の利いた奴は無いんでね、僕ら一生懸命に飛行場の土をね、穴掘って引っ張り出そうちゅうことでね、努力したんだけども。中田少尉はそれでなんとか。坂はほとんど即死の状態だったんですよ。操縦席そのものはがっちりして座席は崩れていなかったですけどね、ちょうどあの後ろの通信の人が乗る座席…飛行機の胴体のくびれた所。そこがね飛行機の一番もろい所。そこが折れたわけなんですよ。そこにグサッといってしまったから。中田少尉はひっくり返しになってちょうど真っ逆さまになった格好で、それを僕らが励ましながら穴を掘って引っ張り出したんですけどね…】

『鈴木日記』

四月二十八日　土曜日　晴

悪夢ノ如キ昨夜ノ雷雨全ク去リ何時シカ
雲ノ晴間ニ満月清光ヲ放ツ
〇三〇〇　起床　御通夜ニ参ズ
一四〇〇　僧侶ヲ招キ棺前祭ヲ施行
一五〇〇　出棺　火葬場ニ送ル
彼ガ悲シキ屍ハ白木ノ寝棺ニ安ケク眠リ
　遂ニサカリ距ツル永遠ヘ鉄扉ノ内ニ閉
サレタリ　遺品ヲ整理ス

四月二十九日　日曜日　晴

天長節　宝寿ノ万歳ヲ寿ギ奉ル
船橋ニ外出ス　面白クナシ

四月三十日　月曜日　晴

坂伍長遺族来隊アリ　北海道ノ釧路ヨリ
遥ケキ遠路　子息ノ遺骨求メテ来ラルヽ
気持　全ク察スルニ余リアリ
薄暮編隊実施ス　予ト宮原伍長ノミ

五月一日　火曜日　曇　微雨

明日故坂伍長ノ葬儀実施ノ為寺院僧侶等
トノ打合セニ忙シ　中田少尉国府台陸軍

病院ニレントゲン撮影ニ行ク　容態ハ大分良好ナルノ様子　安心ス

五月二日　水曜日　雨

朝来　咽ムガ如キ雨粛々タリ　飛行場に近キ××寺ト謂フ小刹ニテ故坂伍長ノ葬儀ヲ挙グ　多数ノ参列ヲ得テ滞リナク終了ス　（本稿では寺号を伏せる）

二二五七　遂ニ若キ坂伍長モ白木ノ箱ニ収マリテ懐カシキ故郷へ温カキ両親ノ胸ニ懐カレテ去ル　嘗テ死生ヲ誓ヒシ我等ト去ルノ忍ビザルヲ痛感シツヽ帰ルナラン　我等ノ心中又同ジ　然シ安ンゼヨ君ガ分骨ハ中田少尉之ヲ抱キテ共ニ敵艦ヲ砕カントス

駅ヨリ帰リテ坂ナキ下士官室ニ集リ思イ出ヲ語ル

中田少尉は、交流のあった原町の八牧美喜子氏（旧姓加藤）に宛てて五月二日の書簡中、このように書いている。

去る二十七日、夜間飛行中残念乍ら事故を起して死にそこなひました　隊員の一名坂伍長は私の同乗者でしたが殉職し惜しいことをしました。（中略）手紙精々下さい　殺人犯になって若干さびしいものです

自ら「殺人犯」と自嘲する彼の心境を、高橋会員が推測も交えてこのように語っている。その概要は次の通りである。

「隊の松戸出陣五月十八日。中田少尉が松戸を発ったのは二十四日。代替機の受領や改修で一人、婦人会の会長宅に残留したが、どこにいても同乗者を死なせた少尉という目で見られる事は避けられず、どれだけ辛く苦しかったろう。普通の若者は特攻に行くとなれば多少なり後ろ髪が引かれるもの。しかし彼は坂さんを追うような心情に駆られてたのではないだろうか。」

また、先に引用した『空の特幹　十勝会』には「古宇田昭夫・談」として

※操縦士の中田少尉は（陸士五七期）「坂君にすまない」と言って二〇・五・二八、坂君の遺骨を抱いて突入散華されたようです。

とあった。古宇田氏は鉾田、黒磯にいた方であったので、中田少尉の同期関係からの伝聞かもしれないが、彼の自責の念がここにも表れている。

分骨を抱いて前進、そして出撃

隊は五月十八日に松戸を離れ、山口県の小月飛行場に向けて前進した。

松戸の出陣式では、町内の写真愛好家が記念撮影に協力している。貴重な記録として現代に残っているが、この写真の中で目を引くのが一番機の小川彰少尉の胸に抱かれた骨箱である。先に引用した、『鈴木日記』五月二日の通り、坂の分骨に他ならない。

本隊が知覧飛行場に前進したのは五月二十五日、この日中田少尉も代替機を受領して到着している。

当時の新聞記事には骨箱についても触れている。二件を紹介する。

戦友の遺骨とともに特攻機出撃

「某基地より山崎報道班員発」（前略）〇時出撃開始、先づ戦闘機が始動を開始して見事に離陸続いて特攻機が基地発進の途中敵機の来襲を受け戦死した佐々木軍曹の遺骨をしっかと胸に抱いた藤井隊長機を先頭に一機また一機と満面にこぼれるやうな笑みをうかべ嬉々と進発基地上空を大きく旋回　見事な編隊で決戦場目指して突進んだ

（二〇・五・二九　毎日新聞より）

「おれは轟沈の戦果　藤井屠龍特攻隊長整備員へ切々の挨拶」

航空総監賞を貰った特幹〇期生の坂伍長も整備員の一員だったが熱心の余り中途で殉職した、その遺骨を抱いて必沈を誓う藤井隊長であった。

（『水戸歩兵第二連隊第三中隊支那事変戦史』より）

前者の記事中「佐々木軍曹」は殉職で一階級進級した「坂軍曹」を示すものであろう。

後者では坂を整備員として扱い、通信機の存在等に触れるため検閲に配慮したのではないだろうか。

遺骨については宮之原太吉氏が高橋圭子会員に対する回答文（昭和五十一年）の中でこのように答えている。

「坂君のお骨については中田少尉が後の飛行機を受領するため皆からおくれたため松戸を出発するときは小川少尉が胸に抱いて隊長機に乗っていたが突入に当っては中田少尉に抱かれて行った筈です。操縦には支障のないよう小箱に納めたものを白い布切れで首から吊り骨箱は丁度胸のところに抱かれていた様に記憶しております」と書かれている。

父の手紙

高橋圭子会員の手元には『新聞切抜　月日不明』として以下の様なメモがある。筆写の様だが、現物は未確認である。一連のメモ用紙を見ると、水戸の藤井中尉のご遺族を訪ねた際に筆写したものかと思われる。

肉親のやうな親しみ　特攻隊に寄せた感謝の手紙

「〇〇発」沖縄周辺の敵艦船撃滅を目指す陸海航空特攻隊の魂魄を●かす敢闘は日を追って激烈を加へつつあるが茨城県出身藤井中尉を隊長とする陸軍特攻隊振武第〇〇隊の壮烈無比な突入の状況が前線基地の吉岡報道班員によって（本社特派員）報道さるゝや感激はその極へ達し熱誠こめた感謝の手紙が舞い込んでいる

「振武隊藤井隊の隊員壮挙決行の数日前某基地に惜しくも殉職したS伍長（北海道出身）の父飛佐吉氏の手紙」

（前略）倅の〇〇基地在隊中にお撮り下さいました写真お送り下され誠に有難う存じます、この写真が祭壇に使用されるとはあなた様も本人もまた私達も夢にも考へなかつたことですが残念ながらさういふ結果になりました（中略　殉職の様子を詳しく書いてある）

思へば可哀想な奴でした、彼も一機以て一艦を屠り得ず無念の極●●●で斃れたのです　折角の御期待にそむいて私も残念でなりません　私も子供四人をもち長男はノモンハンで戦死し二男は南方で戦死…（●印は解読不能）

ここでメモは途切れているが、父の無念に溢れた記事である。現物については調査を継続したいと思う。

おわりに

軍人となって一年少々、将校の道をなげうって即戦場を志した特幹生の一人は、十五年あまりの人生を殉職という形で閉じることになった。その短い人生の最後の記録、そして関係記事などを一端ではあるがご紹介する機会を得た事を嬉しく思う。

特攻隊員は操縦者だけではない。また、戦没者だけが特攻隊員ではない。当時の飛行機は非常に事故が多く、数多くの隊員が実戦前に殉職している。長い年月に埋もれ、世に知られていない隊員が山ほどいる事を忘れてはならない。

（完）

沖縄海上特攻４・７　浜風
浜風乗員　土井兼廣二等兵曹

土井兼廣二等兵曹　大正11年生まれ
呉の写真館にて

海軍入隊

海軍を希望したんじゃなく徴兵です。18年１月に入りました。大竹海兵団で新兵教育をうけました。分隊は15分隊です。上の者にかわいがられ「土井、お前どこに行きたいんだ？」そう言われたので戦艦に行きたいと伝えると、「新兵は戦艦に行くと軍人精神注入棒でしごかれるから、もっと楽なところに行け」と言われました。大竹を卒業してから別府の近くの佐伯防備隊におりました。そうしたら横浜砲術学校から指名で入学の通知が来たんですよ。砲術学校出は成績優秀で表彰されました。その後横浜砲術学校を卒業して浜風に乗ったんです。昭和19年です。配置は機銃でした。

19年11月10日に横須賀砲術学校を卒業して呉の海兵団におったら、浜風行けって。浜風では門司から輸送船の護衛で高雄に行きました。途中、味方の船に接触する事故があり、ものすごい衝撃で魚雷が当たったのかと思いました。台湾で休暇もらって砂糖を土産に買いに行こうと思っていたけど、接触事故があったもんだから休暇取りやめになりました。

帰ってきてからは訓練訓練です。爆雷訓練は魚が浮いてくるから、網持って取りに行く。このころは水兵長で下士官になっていませんから外地での戦果は情報として入ってきていませんでした。でもレイテで武蔵がやられたことも、空母信濃が沈んだことも、戦友から聞いて知っていました。信濃は砲術学校時代、「何やあの大きいのは」って見ていましたから知ってます。やられたと聞いても、でも何とかしてやろうという敵愾心がありました。甲板で訓示をうけたとき、（４月の水上特攻の時）大和を信頼してました。これでやっつけてやるんだと、そんな気持ちが先にありました。

訓練中、商船が事故して２人、いかだに乗って浮いてるんです。助けてやらな

大竹海兵団15分隊
前列から３列目、右から３人目が土井さん

いかんので近づきました。あの時、海は荒れてましたな。いかだに当たらんように近づいて行って、「そのままおれよ！」大きな声で言いました。それでも聞こえないみたい。一人は元気だったけど、もう一人はいかだにベタッと寝て動かなかった。命綱を降ろしたら助かりたい一心で飛びついてきましてね。でもかえしのない綱ですから登っても滑るんです。何回も登っては落ちて登っては落ちてしてる。戦友が体を縄で縛って降りていく準備をしていましたが、しまいに力尽きて流されていきました。もう一人、寝とったほうは助けました。どうなるかわからんもんです。

沖縄海上特攻４・７　浜風

徳山出るまではなにもないですよ。徳山出てから総員甲板に集合して砲術長から「天一号作戦、沖縄海上特攻だ！生きて再び帰ることはない。この作戦は奇襲作戦であり、魚雷戦、砲戦を交え、最後は敵の艦船に向かってぶち当たる！」と説明がありました。

いよいよ最後って気はありました。でも、やってやろうとも思っていました。今の若い人はわからんだろうけど、妻帯して無いから身が軽いし、死ぬこと自体、そんな怖くも思ってなかったですし、国のために死ねれば本望だと、そんな気持ちはみんな持ってました。

偵察機は来ていたようです。待ち伏せしてるとは思ってませんでした。８日の未明に殴り込みをかける前に、敵が来た。味方の飛行機はいませんでしたから。

この日は一面の雲、私は25ミリの単装機銃射手でした。すでに戦闘配置にはついていました。鉄兜なんてかぶったことない。白い海軍帽です。弾は15発入っていて５発に一発曳光弾が入っています。空になると神川って、もう一人の兵隊が装填してくれるんですが、そいつが弾に当たって倒れまして、私一人で転装、射手をやりました。しかしそうなったらえらいもんですね。「なにくそ！」って気になりまして怖くはなかったね。食うか食われるかですから。雲の間から来ますからわかりません。ずいぶん無駄弾撃っています。もし、雲が無かったらもっと当たってます。この雲のせいで大和も主砲の威力全然発揮できてない。とにかくしゃにむに撃ってました。機銃だけでなく主砲も撃ってましたな。そうしたら後ろでドーン！とやられまして、ぶっ倒れました。この直撃で後方にいたものは相当、戦死しています。私は海水をかぶりましたが大丈夫でした。でもすぐに戦闘配置に戻りましたが、その後推進軸が折れまして、これで魚雷来てもかわせませんし、魚雷が当たって、船が３つに割れました。そうしたら、見る見る間に海水が入り込んできまして足もとまで水が来ました。「総員飛び込め！」の号令があったか、なかったかは記憶にないが、飛び込んで、泳いで離れました。角材や漬物樽やテーブルや浮くものがありますから。しばらく泳いだのち、船のほうをみたら艦首のほうが持ち上がってズポンッて感じで腹見せて沈んでいきました。その時の気持ちは何とも言えない。浜風の見納めと思うとホロッときました。

駆逐艦　浜風（昭和１６年ころのもの）
天一号作戦参加時は後方２番砲塔が撤去され３連装機銃に、艦橋前にも３連装機が増設されていた。

漂流

大和が沈んだとき爆発音と２００メートルぐらい黒煙が上がって「ああっ、大和がやられたな」と思って浮いてました。それまでは大和がいるから大丈夫だろうと思ってましたが、やられたとたん、気落ちしましたわ。でも、万が一助かるかもわからんと思って立ち泳ぎしていました。しかし、４月７日ですから寒かったですよ。ガチガチに。小便が出てくると温うてね。でもそんな出るもんでもない。それと浮いてるとき考えるのは親の事です。天皇陛下万歳という人もおるかもしれませんが、私の場合は親でした。嫁さん子供がいたらそっち思うでしょうけど、独り身でしたから。

夕方、敵の飛行機がかなり低空でバリバリ撃ってくる。味方の船は周りにおらんですから。

薄暗くなって敵の飛行機が引き上げてから、味方の船が助けに来てくれました。私が助けられたのは初霜です。大和がやられて絶望してましたが、船が見えた時はうれしかったね。見たら敵か味方かわかりますやろ。運よく目に止まって停泊してくれた。船の後方の階段から上がったのもおりますし、縄梯子であがったのもおりますが、私はね内火艇登ろうと思っても登れなくて、引き上げてくれたんです。そうしたら足を負傷していました。どうやら、最初の直撃弾を食らったとき、弾片がはいったようですが気が立っていてわからなかったのと、海水で洗われて血が止まっていましたから。甲板に引き上げてくれて服を脱いだら血が流れてきた。それまで気が付かなかった。寒くてガチガチ震えていましたよ。引き上げてくれて熱いカルピスを出してくれて、おいしかったねぇ。傷のほうは赤チン塗っておしまい。重症の者は甲板に寝かされていました。

昼なら内火艇で一人ひとり拾ってくれますけど、夕方ですから遠くまで見えず、わかる分だけでしょう。恐らく、船から離れて浮いてた兵隊は味方の船を見ながら救出されなかったから断腸の思いでしたやろ。生と死は紙一重なんですわ。

内地に帰ってからは大和がやられたから情報が漏れないようにどこかの島に隔離されましたからね。その後、かなり化膿しまして、これはいかんということで佐世保の海軍病院に送られて、そこで手当てをしてもらって、別府の施設で弾片の取出し手術をしました。

無抵抗で浮いていて、そこにバリバリ機銃掃射してきましたからね。そりゃ、残忍なもんですね。機銃の音がチュチュチュン！とします。人に言ったら「そんなことするんですか？」なんて言うけど、されました。浮いとってもかなりやられていきましたからね。一人浮いとってさみしいからって集まると標的にされますから、ばらばらにおりましたけど、低空で来るもんですからね。戦後、進駐軍に女の子たちが「ハローハロー」なんてやってましたが、腹立ちましたな。どの顔見ても、機銃していった奴に見えるんですわ。

気力のあるものは助かりました。本田っていうのは片腕になってましたけど浮いてました。戦友会で会った時、背中を流してやったことがあります。名古屋の古川ってのは水かぶって苦しくて、最後、力尽きて沈んでいきましたけど、助けてやることができなかったのは今でも悔やまれますね。

船無き海軍

海軍病院で手術して、その後、呉の海兵団に行きました。日にちは忘れましたけど、私が外出番で外に出てました。駅前のもみじ旅館ってところにおったんですが「兵隊さん！空襲警報ですよ！」って言われたもんだから、防空壕に飛び込んで助かりました。自分で機銃を撃ってるときはいいんですけど、なんもせんと防空壕に入ってるとみじめなもんですね。

呉の街は海と山の間にあるから山手に

焼夷弾を落とすんですわ。あくる朝、駅に行ったら８つある汽車のうち、７つは焼けていました。呉の街も丸焼けでした。広島の原爆の時はピカッて光りました。いい天気だから部下の兵隊使って、ロープ張って士官の毛布を干させていたら、ピカッと光ってドーン！ですよ。「おかしいなぁ、なんやろ。広島のほうやから火薬庫が爆発したんやろか」なんて話をしてました。もくもく雲が上がって赤紫の線が入った感じ。おかしいなあ思いました。そのあと、外出したら町の人が「兵隊さん、広島に新型の爆弾が落ちて全滅ですわ」なんて言う。「そんなことあるかよ。新兵器の爆弾落とすんやったら大阪か東京に落とすやろ」「兵隊さん、何も知らんのや。全滅ですよ」

半信半疑で一晩町で泊まってあくる日、海兵団に帰ってみたら大騒ぎ。当直で残ってた者は人命救助で広島に行って被ばくしてますのや。私は外出できてたから助かった。「えらいことやったで。担架で運んでもすぐ死んでまうんや」なんて大変なこと言うてましたわ。

終戦で陛下の放送を聞いたとき、「最後までやるんや！」言うものがいたり、戦争が終わったんだからって、黙っていなくなるものがいたり、いろいろです。「命のおしいものが陛下にこんなこと言わせたんじゃろう」そういう者もおりましたが、一応、戦争が終わったと分かりました。負け戦になるから残念な気持ちはありましたよ。やれやれって気持ちはなかった。私は軍医長の従兵長やってました。「土井は大阪だな。家はあるのか？」わからんけど「あります」「そうか。じゃ、金は出してやる。よくやってくれた。俺は残務整理があるから」軍医長ですからなんか病名をつけて帰郷療養の名目で１０００円ぐらい手当もらって８月の暮れ帰りました。同僚は「進駐軍が来とるで、電車乗っても降ろされるで。万が一のために毛布と食料持って帰れ」そういうわけで、毛布２枚と乾パンや缶詰もらってきてリュックに詰めて帰りました。呉の駅に行ったら何にもなく汽車に乗れました。デマがいろいろ飛んでましたしな。婦女子は暴行されるとか。大阪に帰ってきたら突然帰ったもんで「呉は丸焼けやって聞いたけど、よう帰ってきたなぁ」って親びっくりしてましたわ。

慰霊祭

戦後、第２艦隊がたどったコースを慰霊する洋上慰霊祭がありました。戦友ほか、遺族の参加もあり、その場所に着いたら断腸の思いでしたな。一番感銘を受けたのは小林武蔵少尉の奥さんが見えていまして、艦橋からテープを海に投げて「武蔵さん！このテープを伝ってきてください！一緒に帰りましょう！」そう叫んでいました。みんな泣きましたな。夜中にその奥さんが大きな声を出して、武蔵さんが来たそうです。霊魂不滅なんでしょう。そんな話がありました。慰霊祭の最中は静かでしたが、終わってから船が縦に揺れました。仲間たちが礼を言っているのでしょう。最後、50回忌の洋上慰霊祭の時は手嶋さん（元大和乗組員）から連絡があって、１年早めてやりましょうと言う。それで早めて慰霊祭をやって、あくる年、手嶋さんが亡くなりました。戦友と遺族で船を借り切っての慰霊祭です。手嶋さんが赤字だったら僕が出すからと言ってくれたからできた慰霊祭でした。

結果論ですが航空隊の援護なしに成功しない。しいて言えば大和に死に場所を求めたような作戦です。そのような気がします。反対意見もあったようですが、我々にはわからんです。ただ、やってやろうと思って戦いました。

インタビュー日時

平成26年２月22日

連載　山ある記６
千葉県「御殿山・大日山」

会員　池田　康博

低山の魅力は「気軽に登れる」ということだろう。房総の山々はその要望に応えてくれる。それでも今回は少し長く歩こうということで、南房総のほぼ中央部に位置する御殿山から大日山まで往復８km強のコースとした。

御殿山に登るには、電車を使えば、ＪＲ内房線の岩井駅で降りて、バスで県道89号線の山田中バス停まで行くことになる。傍には高照禅寺という寺がある。バス停には駐車場も整備されており、５月の連休に車で行った。

午前７時30分、駐車場に車を止め、県道を横断し標識に従って御殿山に向かった。

最初は両脇が田んぼ、次いで、外来種のキョン対策と思われる柵に囲われた畑と人家のある山道を登って行く。途中、大黒様が鎮座する展望台で、南房総のマッターホルンと言われる伊予ヶ岳や双耳峰の富山を望み、そして、山頂部が崖のような急登の御殿山に着いたのは８時23分であった。

御殿山山頂から望む南房総の山々

標高三百六十三ｍの山頂はこのコースで最も高い。山頂部は広くはないがベンチもいくつか置いてある。しかし、富山とその向こうの相模灘はなんとか望むことができるが、他に展望はなく先へ進むことにした。山頂からの急な階段を下ると、鷹取山、宝篋山、大日山まで、所どころ急な階段はあるものの、概ね平坦な尾根歩きで、木々の間を鶯の鳴き声を聞きながらの山歩きである。

標高三百三十三ｍの大日山到着は９時26分、ここには小さな石の大日如来像が祀られている。山名からして信仰の山なのであろう。しかし、ここもあまり展望は良くなく、10分ほど休憩して帰途に就いた。

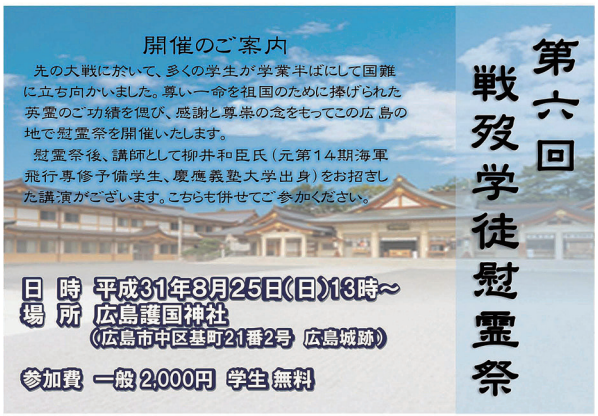
御殿山の下まで引き返した時、さすがに疲れも出ていて、山頂への急な階段を登る気が起こらず、まき道を通って大黒様の展望台まで戻ってきた。ここで昼食を摂ろうと考えていたが、登山者もいてスペースがなかったので更に下り、もうすぐ人家という所まで下りたところで、登山道から少し引っ込んだ所にベンチを見つけたので、そこで昼食を摂り、12時前に駐車場に着いた。

因みに、御殿山、大日山、鷹取山は「房州低名山」だそうである。

広報の部屋

「第六回戦歿学徒慰霊祭」のご案内

日　時　令和元年８月25日（日）
　　13時～
場　所　広島護国神社
　　広島市中区基町21番２号　広島城跡
参加費　一般２千円　学生無料
主　催　戦歿学徒慰霊祭実行委員会
後　援　呉水交会・広島呉隊友会
申込み　ＴＥＬ０９０－７８９６－４８３０（実行委員長　寺崎）
メール　h.ireisai@gmail.com



柳井和臣（やないよしおみ）先生　プロフィール

大正11年生。山口県出身。
昭和18年10月，慶應義塾大学法学部在学中，学徒出陣により海軍へ入隊。同年12月，大竹海兵団入団。
昭和19年2月，第14期海軍飛行専修予備学生となり土浦海軍航空隊へ入隊。昭和20年5月，神風特別攻撃隊第6筑波隊として出撃し，生還。

お申し込み・
お問い合わせ先　TEL　090-7896-4830　（実行委員長　寺崎）
メール　h.ireisai@gmail.com

※恐れ入りますが，当日は公共交通機関のご利用をお願い申し上げます。

主　催　戦歿学徒慰霊祭実行委員会
後　援　呉水交会・広島県呉隊友会

第1部　柳井氏来歴紹介（14:00～）

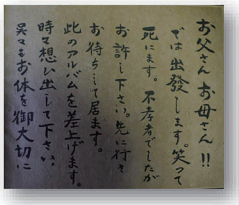
柳井氏は昭和18年10月、慶應義塾大学在学中、学徒出陣で海軍へ入隊されました。第14期海軍飛行専修予備学生として訓練後、筑波海軍航空隊で特攻隊へ志願され、昭和20年5月、神風特別攻撃隊第6筑波隊として出撃した経験をお持ちです。第1部では柳井氏の軍歴を中心にお話をうかがいます。

柳井少尉（当時）

第2部　手記・アルバムの紹介（15:00～）

吉田信大尉は柳井氏の同期で、昭和20年5月、鹿屋海軍航空隊から第5筑波隊として出撃されました。
第2部では、吉田大尉の遺した手記や、柳井氏が当時作成したアルバムを拝見しながら、当時のお話をうかがいます。

柳井少尉（左）と吉田少尉（当時）



柳井氏のアルバムより

特攻文芸

短歌・俳句・川柳の部

● 散る花に　想いせつなき　春の宵

淳

● 季過ぎて　残りし花の散りざまに
かくたる人の　生きざまをみる

淳　子

● 吹上の　浜は見えねど　波音は
林を超えて　我を打つ

よみびとしらず

● 五月病いつの間にやら通り過ぎ

● 坂道を帰りは楽と元気付け

● 約束をしたかも知れぬ〇印

井下駄マスオ

事務局からの報告等

寄付者御芳名（敬称略）

（平成31年1月1日～3月31日）

（単位千円）

一〇〇〇　多田野　弘
二七　近藤　敬子
一七　服部　武志
一〇　中溝　二郎
一〇　上西　幸子
一〇　遠藤　和子
一〇　高松　道雄
一〇　小林　彦重
一〇　森山　正義
一〇　石井　令彦
一〇　高橋　芳幸
一〇　浮世　喜昭
八　椿　孝則
七　高山　友二
七　斎須　重一
七　野俣　明
七　早田　亮彦
七　松中　義昭
七　原　照寿
七　小堀桂一郎
七　久保　巍
一〇〇　呉　奈々子
二七　齋須　将
一五　降矢　達男
一〇　古賀　一郎
一〇　萩原　健一
一〇　田辺さだ子
一〇　川岸　義視
一〇　鮫島美知子
一〇　原島　淳子
一〇　多田　剛
一〇　鈴木　敏博
一〇　吉田　三郎
七　早瀬　登
七　井川　嘉江
七　新垣　元武
七　丸原　巧
七　三宅　好美
七　服部　義隆
七　千葉　孝
七　藤井　日正
七　下森　康玄
七　中村光太郎
七　大坪万里子
七　氏家　康宇
七　藤永　雅彦
七　天野　弘子
七　渡部　晃
七　津田　智世
七　神林　千祥
六　小山　祥子
六　河野　正信
六　伊藤　元夫
五　市川　雄一
五　古屋　七郎
五　加藤　千佳
五　大澤久美子
五　水気　博美
五　竹本　佳徳
五　明石　英次
三　清水　典郎
三　當金　勝雄
三　三春　仁
二　廣田　正
二　柄澤　寛之
二　國武　統士
二　工藤　重民
二　布施木　昭
七　武谷　孝生
七　舘本　勲武
七　桜井　實
七　幸野　聖子
七　小池　末人
七　大澤　和久
七　岩崎　順哉
七　茂木　昌三
六　堀江　正夫
六　加藤　拓
五　湯澤　一枝
五　臼田　智子
五　丸　利郎
五　堀川　淳一
五　中島　尚史
五　後藤　昭一
五　相山　正人
三　小森　正明
三　飯岡　哲子
三　中村　竹雄
三　松田　栄
二　広瀬　勉
二　箕輪　敏
二　阿部　敏行
二　吉田　治正
二　川田久四郎
二　大賀　龍吉
二　田中　正和
二　新田　和子
二　後藤　文夫
二　今井　敏
二　柴　芳文
二　髙橋　勝
二　濱田　秀逸
二　黒田　博
二　後藤　英夫
二　菊地　昭夫
二　井出　隆夫
二　市来　徹夫
二　肥田木多恵子
二　河島　慶明
二　岡部　俊哉
二　坂本　康子
二　中川　望
二　城ヶ端　専
二　佐藤　義信
二　林　佐吉
二　石田　賢一
二　内山　正義
二　伊室　一義
二　中田　晃文
二　若月　良介
二　丸橋　安夫
二　埼玉偕行会
二　鍋谷　欣市
二　三浦　守
二　山本　健雄
二　長谷川知幸
二　栗原　巌
二　牧　勝美
二　菅原　春生
二　樽井　弘和
二　岩崎　昭男
二　伴野　富夫
二　樫村　保貞
二　大瀧　成紀
二　塚原　正
二　佐藤　一志
二　川本　修二
二　土橋　猛
二　橋本　亀
二　今井　正己
二　森山　敏明
二　北村菜穂子
二　鈴木　純夫
二　松本　賢二
二　牧　重勝
二　江守　聖学

二　吉原　俊明
二　鴫原　正孝
二　安藤佐智子
二　小林由貴子
二　湯野　隆子
二　吉田　紀
二　林　秀一
一　大川　吉昭
一　呉　正男
一　手塚　巌
一　酒見　奎一
一　深山　明敏
一　藤田　幸生
一　衣笠　陽雄
一　金子　敬志
一　岩﨑　茂
一（公財）千鳥が淵墓苑奉仕会
一　光安　良一
一　池田　守
一　上田　浩寛
一　斉藤　俊介
一　佐多　和仁
一　渡辺　由佳
一　渡辺　里佳
一　田村　政昭
一　福島　隆夫
二　田中　臣二
二　堂坂　清
二　田中　育子
二　平川　善人
二　福島　八郎
二　山本　寛
一　中村　貞三
一　小川昭二郎
一　大林　喜一
一　尾関　南山
一　吉野　信二
一　水町　博勝
一　小倉　利之
一　羽渕　徹也
一　圓藤　春喜
一　岩崎　淳治
一　大手　良之
一　平野　勝也
一　荒木　紫帆
一　橋本大二郎
一　青木　義博
一　藤野　洋政
一　牧野　洋子
一　正本　禎亮
一　石上　豊

新入会員名簿（敬称略）

（平成31年1月1日～3月31日）

北海道　武田　司
栃木　小山　祥子
埼玉　佐々木敏子　佐藤　俊江
千葉　織田　邦男
東京　阪井　泰彦　小山　晃史
野村　浩二　松本　幹
神奈川　石坂　薫　古川　淳一
久保大二郎　栗原　浩之
田代　勉
兵庫　小椋　淳二
奈良　山口　守世
広島　堀　チヅコ
山口　山本　英輔
香川　肥塚　肇雄
福岡　香月　健児
宮崎　秋田　省一
沖縄　濱田　種夫

会員訃報（敬称略）

謹んで哀悼の誠を捧げます

岩手　石直新三郎（30・5）
栃木　兵頭　春夫（30・7・30）
千葉　荒木　毅（30・1・27）
齊藤　達人（30・8・26）
竹尾　正利（31・2・4）
東京　清水　博（29・10・10）
東京　関口　旭（30・11）
草開　省三（30・12・2）
小貫　達雄
網野　弥生
神奈川　櫻井　光夫（29・7・29）
新潟　工藤　正夫（29・7）
大塚　喜衛
富山　高松　道雄（30・12・14）
徳田　寿
愛知　小出　勲（30・10・29）
中野　裕正（30・12・10）
大阪　緒方　惟隆（30・9・2）
田端　一二（30・11・13）
東井　伍郎（30・12・22）
吉村　精仁（31・1・23）
和歌山　小松　雅也（30・8）
島根　横山　直材（30・8・13）
愛媛　松本　憲二（30・4）
福岡　鮫島　千春（30・3）
久保田尚美（30・8・16）
中村　昭典（30・12）

会員ご入会のご案内

「特攻隊戦没者に感謝と敬意を」

当顕彰会は、先の大戦の末期、一つしかない命を、祖国の安泰と家族や大切な人のために捧げられた特攻隊員に対し「あなた達のことは忘れません。有難うございます。感謝します。私たちも努力します。どうぞ安らかに！」を胸に、慰霊・顕彰を行う団体です。これにご賛同して頂ける方ならどなたでも会員にお迎えいたします。多くの皆様のご入会をお待ちしております。

○当顕彰会の主な事業

・特攻隊戦没者の慰霊顕彰（他団体への参加を含む）

・会報の発行等による特攻及び戦没者の伝承等

・特攻に関する資料の収集、調査、図書等の貸出講演会等の開催その他

○年会費

・一般会員　３０００円

・学生会員　１０００円

○　URL:http://www.tokkotai.or.jp

ＱＲコード

ご投稿についてのお願い

ご投稿に際しては、次の点にご留意くださるようお願い致します。

1　原稿は、手書き、ワープロ、パソコン作成のいずれでも結構です。可能ならば、ワードファイル、又はテキストファイルで頂ければ幸いです。ＰＤＦファイルは編集の都合上お　受けできません。

2　記事の取捨選択、紙面の都合等による一部割愛、修文等については、当顕彰会にお任せ願います。

3　投稿記事に関する写真がありましたら、なるべく添付して下さい。

4　原稿、写真等は、原則としてお返し致しませんが、必要な場合はその旨お書き添え下さい。

5　会報・機関紙、投稿記事等の送付先は、左記宛てとして下さい。

〒１０２-００７２
東京都千代田区飯田橋一丁目５―８
東専堂ビル２階
公益財団法人　特攻隊戦没者慰霊顕彰会
電　話０３-５２１３-４５９４
ＦＡＸ０３-５２１３-４５９６
E-mail　tokuseniken@tokkotai.or.jp